ヒロインとの１ページSS

やなや

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ゆずソフトヒロインとの１ページＳＳ

Ｔｗｉｔｔｅｒ（@ｌｌｙａｎａｙａ）にあげたものを（多少いじって）後載せ。

大体２話ずつまとめて投稿します。

キャラごとにまとめてはあるけど投稿順はバラバラになります。

１話大体５００字くらいなので気軽に読んでいただければ。

目　次

ＲＩＤＤＬＥ　ＪＯＫＥＲ／在原七海
二人の関係／借り物競争 ―― 1
バレンタイン／お返し ―― 3
体操服／体操服２ ―― 5
お姉ちゃん／妹 ―― 7
早起きの理由／家出 ―― 9
ハートの贈り物／あなたの好きな長さ ―― 11
優先順位／ｈｉｔ　ａ　ｋｉｓｓ ―― 13
あなたのいない世界　ＳＩＤＥ　Ｓ／ＳＩＤＥ　Ｎ（バッドエンド） ―― 15
雨降り緊急連絡／その傘に守られて ―― 18
ななみと月下の詠唱／お披露目会のターゲット ―― 20
ずっと親友／　秘密のツーショット ―― 22
思い出計画中／思い出休憩中 ―― 24
傘の中の幸せ／忍者七海 ―― 26
サノバウィッチ／椎葉紬
「お約束」／体操服 ―― 28
にゃーにゃーにゃー／予約 ―― 30
甘えたい気分／ご挨拶 ―― 32
おはよう朝のラブコール／帰り道は手を繋いで ―― 34
喫茶ステラと死神の蝶／汐山涼音
私を呼ぶ声／壁ドン ―― 36
眠れない夜は、キミと／寒空おしかけメッセージ／エイプリルフール ―― 38

私を温めて／見た目も中身も　41
仕返し／戦場の給水タイム　43
新しいお話
キミに似合うと思う／月よりも星よりも　46
兄妹の昔／恋人の未来　48
エスコート／交換こ　50
夏風邪／ハート付きのメッセージ　52
そしてミノムシへ／インプリンティング　54
妹の矜持／むしよけ　56
暑い夜とお熱い二人／願いの叶え人　58
口実、雨／キミの隣　60
隠密訓練／喧嘩の数だけ　62
帰省中のとある一日ＬＥＶＥＬ１，２，３　64
ザクザクザクザクザクザクザク……／ネコネコウインク
67
七海インポスター／七海インジェクション　69
ご挨拶／五月病特効薬　71
妹空間／デートが始まるタイミング　73
いつもの日常に飴玉を／雨の待ち人　75
すきだよ／固定観念　77
タオルに込めた想い／欲しかった思い出　79
ハローインナイトメア／焦げ茶色のやさしさ　81
特別な日には／ポッキーインパクト　83
慣れてたはずの香り／等身大の初恋　85
わたしにとっての／アツアツ鍋パーティー　87

秘密の暴走（小）／特別な一輪 ―― 89
不意打ちツーショット／ハートショット ―― 91
バレバレの贈り物／願いと答え ―― 93
新しい景色／推定高さ三メートル ―― 95

ＲＩＤＤＬＥ　ＪＯＫＥＲ／在原七海

二人の関係／借り物競争

☆二人の関係

「こちらレヴィ６、ターゲットを確認。レヴィ９と共に尾行に入ります」

暁君の声に了解、と室長から返事がある。

場所はとある商業施設。今は能力を使った犯罪容疑者の従業員を追っている。

暁君から差し出された手をしっかりと握る。今はお仕事中だけどこんな商業施設でコソコソしていたらそれこそ怪しまれてしまうので、わたしたちは目立たないように仕方なく恋人のふりをして歩く。ふりといっても実際に恋人なわけだが。

わたしと暁君の関係は難しい。関係が悪いというわけではなくいろいろな関係が二人の間に乗っかっている。血のつながっていない兄妹で、ちょっと前からは恋人で、そしてもう一つ。

ターゲットが関係者専用の扉から店内部へ入る。さすがに私服姿で追いかけるわけにはいかないから、暁君が自然な動きで物陰に隠れ上着を脱いで中に着ていた制服のステルス機能をＯＮにする。

「従業員エリアのマップも押さえてある。サポートは任せてよ」

「ああ、頼むぞ〝相棒〟！」

二人で挑むのなら、彼が必要としてくれるのなら、もう他には何もいらない。

☆借り物競争

パン！と破裂音がする。今日は俺達の通う中学校の体育祭で、今は二年生の借り物競争を行っている。そして今しがた始まった組には七海が出場していた。

あまり速くはない足で一生懸命お題箱まで走り、お題を引く。そし

て一瞬固まる。と思ったらギュン、とこっちを睨みつけながら走ってくる。お題は何だろうか。学校だし「ペン」とか「消しゴム」とか、もしくはすぐに見つかりそうな「眼鏡」とか？ちょっと難しく「お守り」とかも可能性としてはあるか。

「暁君、ちょっと来て！」

まさかのご指名だった。「家族」…だとご父兄が来られない子が無理だし、「男子生徒」や「先輩」あたりだろうか。

もの選びで時間のかからなかった七海は割といい順位でゴールし、係の三年生にお題を見せる。あ、この係俺のクラスの女子だ。

「うーん？…うん！オッケー、ゴール！」

係からお題合格の判定がでて無事にゴールできた。七海も喜ぶかと思ったらうつむいて顔をあげない。なんか首元まで赤いし、この程度の距離でそんなに体温上がるものか？あと、係の女子が俺たちのことをニヤニヤ見ているのが気になる。

「それで、お題は何だったんだ？」

「なんでもいいでしょ！ってうわ、なんで暁君眼鏡かけてるの？じゃらじゃらうるさいと思ったらいっぱいペン持ってるし。今日要らないでしょ？お守りまである…」

バレンタイン／お返し

☆バレンタイン

チョコを刻んで湯せんし、それやこれやを混ぜ合わせて型に流し込む。あとは焼き上がりを待つ間にクリームを作り上げ、その他もろもろの用意をして、と。

今年は休日にこの日を迎えたので準備にはたっぷりと時間を使える。そしてわたしの優位を存分に使おう。

ケーキ丸一個はちょっと大きすぎるかもだけど、わたしも食べるしお父さんもいるから問題ないだろう。味についても長年の研究成果を存分に発揮できている…はず。

アラームがスポンジが焼きあがったことを知らせてくる。あとはしっかり冷めるのを待ってから。

包装はしないから直接お気に入りの大皿に乗せて。ラッピングで飾らない分ケーキ本体の見栄えを意識して。

絶対に食べてもらえるという安心感と、一緒に暮らしているからこそ持ち運びを意識しない大きくて繊細なお菓子で挑める、それが妹である私の特権。

別に今すぐ心を伝えたいわけでもないし、そもそもわたしはこの気持ちにまだ名前を付けないままでいようと思っている。

それでも、せっかくの好機にアピールしない手はない。わたしは妹なんだから、自分を大事にしてくれているお兄ちゃんにチョコをあげることくらいなんてことないわけで。

玄関が開く音がして、二人の話し声が聞こえてくる。　いざ！

「おかえりなさい。お兄ちゃん、お父さん。ハッピーバレンタイン‼」

☆お返し

まさか自分がお返しに真面目に悩む時が来るなんて思いもしなかった。

例年は時期になるとデパ地下に行って彩り豊かに並んでいる中か

ら好きそうなものを選んで渡すくらいだった。
どうせ何を渡しても喜んでくれる、くらいの感謝や愛情はあっても込める気持ちはもらったものとは比べようのない代物。なんの参考にもならない。
人に聞いても「気持ちが大切だ」といわれるだけ。気持ちの伝え方こそ知りたいのに。
女の子と意識するようになって、その飾らない笑顔は自分だけのものだと感じるのは、この綺麗な女性は自分のなのだと誇示したいのは優越感に浸っているだけだろうか。
恋人になってから初めてのこの日。食べて笑ってお終いではなく、何か形に残るものを選びたいと思うのは女々しいだろうか。
お返しで「好き」を伝えるときキャンディを選ぶのが「長く続くから」なら、永遠に残り続けるものを贈りたいと考えるのは欲張りだろうか。
控えめなラッピングを施された箱の中、彼女の瞳と同じ色をしたネックレス。
どうせ何を渡しても喜んでくれる、ならばこの気持ちを形にしたい。伝えたい。
彼女の部屋の前に立ち、ノックをする。すぐに返事があり扉が開いた。
俺はどんな顔をしているだろうか。彼女はどんな反応をしてくれるだろうか。
「ハッピーホワイトデー。これは俺からの気持ちだ」

体操服／体操服２

☆体操服

「さ、暁君！」

二時間目の休憩時間が始まってすぐに慌てた様子で七海が俺の教室を訪ねてきた。あまりに慌てた様子に何事かと思いこちらから聞く。

「どうしたんだ？少し落ち着けよ」

「落ち着いてられないよ！早くしないと休み時間が終わっちゃう！暁君、体操服貸して！」

はぁ？と呆れると七海はまくしたてるように

「下は持ってきてたからジャージだけでいいから。この時期に半袖は寒いよー」

確かに最近はよく冷える。特に今日は一面曇り空なので余計に肌寒く感じるだろう。

「それなら他のクラスの女子に頼めよ。それに一時間目が体育だったからそこまでではないにしても汗かいてるぞ？」

「他の子にいきなりこんなお願いできないよ。それにお兄ちゃんのならわたしは大丈夫だから！借りてくね」

そういうなり俺のジャージを引っ掴んで走り去ってしまった。

本当にもう、お互いいい年なんだから気を付けてほしい。普段はシスコンきもいとか言ってるくせに慌てているからってそんなことを教室で大声で言うなんて。

俺は後ろでニヤニヤしている三司さんや恭平を睨みつけてから机に突っ伏したのだった。

☆体操服２

少し大きめのジャージがずり落ちないように紐をしっかりと結ぶ。袖を折って動きやすいように調節する。まだぶかつくけど許容範囲。

「あ、七海ちゃん間に合ったんだ。よかった」

「うんギリギリセーフ。体育の先生怒るとちょっと怖いから本当よかったよ」
わたしに気づいた千咲ちゃんと柔軟体操を始めると、冷たい風が吹きつける。
「ひゃー、すっごく寒い。七海ちゃん、ジャージ借りてきて正解だよ。凍えちゃうよ！…そういえばずいぶん時間かかってたけど誰に借りてきたの？」
え、それは…と言いよどむと千咲ちゃんはニヤニヤと笑みを浮かべて、
「わかった！お兄さんの所まで行ってたんだ！そこまでいかなくても隣のクラスの子に借りればよかったのにー」
わかっている。その通りなのだ。その方が確実に早かった。でも焦ったわたしはなぜだか暁君に頼ることしか考えられなかったのだ…。なんてブラコンみたいなこと絶対に言えない。暁君にもちょっとごまかした。
「いひひ、七海ちゃん授業始まる前から体ポカポカしてきたね。お兄さんのジャージがあったかいのかなー？」
「う、千咲ちゃんあんまり意地悪言わないで」
そう言い返しながらも本当にいつものジャージよりも暖かい気がして今日の授業は寒さなんて感じることはなかった。あと、少し暁君のにおいがした。

お姉ちゃん／妹

☆お姉ちゃん

あ、これはきっと夢なんだな、とわたしは思った。さっきまでリビングで洗濯物をたたんでいたはずで、おそらくはそこでうたた寝をしてしまっているのだろう。

だって今目の前にいる暁くんの背が私よりも低いんだから。しかも、私のことを「七海ちゃん」と呼んでくる。お父さんの「七海ちゃーん♡」と可愛がるような呼び方ではなく、むしろわたしに甘えてくるような呼び方。やだかわいい。

「ねえねえ、暁君。ちょっとわたしのことを〝お姉ちゃん〟って呼んでみてよ」

とお願いしてみる。暁君はちょっと戸惑った様子で

「お、お姉ちゃん……？」

きゃーーー‼　思わず歓声を上げてしまう。かわいい！　かわいい！　かわいい！　抱きしめちゃいたい。抱きしめちゃおう。ぎゅーー。

「わっぷ!?」

暁君がちょっと苦しそうな声を出した気もする。でもだめ我慢できない。

「んー、いい子だね暁君。今日はお姉ちゃんが暁くんの好きなもの作ってあげるからね。何食べたい？いっぱい作ってあげるからね。お姉ちゃんがいっぱい甘えさせてあげるからね。思いっきり甘えていいんだからね！」

その日の晩御飯、暁君がいつもより手伝いをしてくれた気がする。途中で、なにかぼそぼそと「下剋上阻止……」と聞こえた気がした。

☆妹

わたしが引き取られた先には一つ年上の男の子がいた。ぶっきらぼうで話しかけにくくて、それでもわたしのことをしっかり見ていて

くれているのがわかった。だからわたしはこの人の「妹」になりたいと思った。

学院の放課後、特にあてもなく敷地内をさまよう。もう慣れた道だけどなにか変化はないか、「夜」に支障の出ることはないか、少しでもサポートできることはないか。

そんな感じで歩いているとよく見知った顔を見つけた。

「あっ、暁く……

「見つけたー！」

わたしの声はもっと大きな声にかき消された。声はこの学院に転入してから知り合った女子生徒のもの。暁君に駆け寄りなにか話し始める。

わたしには聞こえない声。わたしには向けない目。わたしには見せない顔。……わたしはそんな表情見たことない。少し赤らんで照れたように笑っている。こちらからは見えないけど女子生徒の方も同じなんだろう。

きっとこの先わたしには見せてくれない、あの女子生徒だけのものなんだ。

二人並んで遠ざかっていく背中を見送りながらわたしは一人そこから動けなかった。

わたしはあの人の「妹」になりたいと思った。

わたしはあの人の「妹」にならなくちゃいけないと、思った。

早起きの理由／家出

☆早起きの理由

動きやすい格好に身を包んだ七海がやたらと張り切って伸びをしている。

「珍しく朝から待ってると思ったらどうしたんだ？　一緒に走るだなんて」

今朝、日課のランニングに向かうと寮の下で七海が俺のことを待っていたのだ。

「別にー。わたしも裏方とはいえ体力つけておくに越したことはないし、朝から会えるんだからもっと喜んでよ」

「そりゃ嬉しいことは嬉しいが、早起きして朝から走って一日もつのか？」

「なにもお兄ちゃんのペースで走るわけじゃないよ。気にしないでおいてっちゃっていいからね。あ、でもランニングコースは最初に教えてほしいかな」

そう言ってスタートだけは知っている俺のランニングコースを先に進み始めた。

「最近、クラスはどうだ？　友達と仲良くやれているのか？」

俺はすぐに追いつき横に並んで訪ねる。

「なに？　急に。わたしたちが転入して結構経つよ？　今更だよ」

「ほら、俺たち付き合い始めただろ。兄妹でなんて、とか周りにいわれてないかなって」

「あはは、心配しすぎだよ。大丈夫。それにわたしには千咲ちゃんもいるからね。絶対に味方でいてくれると信じられる、大切な親友だよ」

そう笑う七海にその言葉が嘘ではないことを確信して安心する。それはそうと……。

「その大切な親友に聞いたんだけど、最近七海が体重計に乗って落ち込んでるって……」

「……たった今、大切な親友に大切な話ができたよ」

☆家出

「総員、探せ！　何としても見つけ出せ！　一刻も早く保護するんだ！」

普段からは考えられないほど冷静さを失っている室長が叫ぶ。まあその気持ちがわからないでもない。室長の焦り具合とは裏腹に端末から聞こえる特班の面々の返事は「う～す」や「へ～い」などというやる気が微塵も感じられないものだったからだ。

かく言う俺もやる気はない。捜索範囲になっている自宅付近をテキトーに歩きながら目標を捜索していた。

なんとなくこっちかな？　という方に進むと、いた。体育座りをして顔をうずめるように縮こまっている。

足音に気づき小さな影が顔をあげる。やってきたのが俺だわかると一瞬微笑んだ後、プイっとそっぽを向いてしまった。

「みんな探してるぞ。帰ろう」

「知ってるよ、私の端末にも筒抜けだから。それにみんな探してる〝ふり〟でしょ」

だよな、と俺は笑う。いくら組織の長の命令とはいえ親子喧嘩による家出娘の捜索なんて真面目にやるほどみんな暇じゃない。

「対象、保護しました。室長は無視して解散してください。ご迷惑おかけしました」

と親父以外の端末にメッセージを送る。そして七海の手を引き言う。

「さ、帰ろう。コンビニで何か好きなもの奢ってやるよ」

端末からは「七海ちゃ～ん、ごめんよ～」と情けない父親の声が流れてきていた。

ハートの贈り物／あなたの好きな長さ

☆ハートの贈り物

休日の昼下がり、いつものメンツでトランプのいろいろなゲームを楽しんでいた。

ただ、少し前から七海の顔が暗いのが気になる。原因は確実に、ゲームのたびにボコボコに惨敗していることだろう。七海はポーカーフェイスとか下手だから仕方ないが。

なんとかして勝たせてやりたいが、今のゲームはババ抜きだ。運要素が強いこのゲームで手助けは難しい。俺のカードを七海が引く位置にいるから、最悪の場合には、ババは俺の手札として死守してみせる。……七海が既にババを掴んでいないことを祈って。

さて、七海がカードを引かれ、続いて俺から引いていく。ダイヤのA。そして厳しい表情。残念ながらペアは生まれなかったようだ。

今度は俺が隣の恭平から引く。と、これは。

俺は最小限の動きで、みんなが俺たちに注目していないことを確認した後に小さく、

「七海」

と呼びかけ、一枚のカードを少しだけ上にずらす。

七海は小首をかしげると、次の番で素直にそのカードを引き抜いた。

「……！」

俺から贈ったカードを見ると、七海は頬をうっすら紅く染めた。ちょっと手助けしたくらいでそんなに怒らなくてもいいと思う。

「……バカ」

七海はそう言ってみんなが不審に思う前に、二枚の赤いカードを場に捨てた。

☆あなたの好きな長さ

七海の機嫌が妙に悪い。

何か怒らせるようなことをした覚えはないが、外出から帰ってきたら俺のことをじっと見つめ、すぐに顔を伏せて立ち去ってしまった。
外出先で何かあったのだろうか。
向こうから言ってこない分には、こちらから下手に口出しできないのだが。
ソファで横になってそう考えているうちに、どうやらうたた寝してしまったようで。
気が付いたら、目の前に七海の頭が見える。ソファに背を預けて座っているようだ。
俺は目を閉じたまま、そんな七海の頭を――ポン、と。優しくなでる。そしてそのまま七海の髪をすいていく、……途中でいきなり抵抗が消えた。
普段と違う感覚を不思議に思い、二度三度と髪をすく。しかしどうしても途中で感触が途切れてしまう。そのことに慌てて目を開けて確認をする。
「七海、お前髪切ったのか」
「……気づくの遅いよ、バカ。少しだけど女の子が切ったことくらい気づいてよね」
七海はそういうと、少し短くなった髪を手で持ち上げて問いかけてくる。
「どう？　似合う？」
「……似合っていると思う。……でも、前のもっと長い方が良かった」
「そっか。……じゃあ、しばらくは髪を切らないでおこうかな」
結局、元の長さまで伸ばした後、七海が髪を短くしたのを俺が見ることはなかった。

優先順位／ｈｉｔ　ａ　ｋｉｓｓ

☆優先順位

「お兄ちゃん何読んでるの？」

「んー？」

わたしの質問に、顔も上げずに寝ころんだまま本の表紙だけを見せてくる。父娘が砂浜で遊んでいるその漫画は、わたしもずっと楽しみにしていた最新刊。おのれ先に読むとは。

「おーにーいーちゃーんー？」

「あー、後でなー」

なによりも許せないのは、妹がこうして構ってあげているのにろくに反応しないことだ。たまの休日にゆっくりしたいのはわかるが妹に対する態度がなってない。

それならば、と。

仰向けで本を掲げて読んでいる、その腕の中にずぼっ！　とダイブする。

体勢を整えると……想像以上に近い距離。それはそうだ。今、格好的には抱きしめられているんだから。自分でやっといて、あわあわと自分で慌ててくる。近い近い、本当に近い。

……それなのに暁君は、

「七海、読めない。邪魔だ」

全く意識していないどころか、この状況でも漫画を優先しようとしてる。許せぬ。

「せっかくのお休みなんだから、お買い物いこうよー。おーねーがーいー、お兄ちゃーん！」

今日は絶対に一緒に出掛けてやる。可愛い服に着替えてアピールして、妹は女の子なんだぞと知らしめてやる！

☆ｈｉｔ　ａ　ｋｉｓｓ

本日は球技大会。そして、俺の参加種目は野球だ。

青空が晴れ渡るように天気に恵まれ、絶好の運動日和……なのだが。
昨夜、というか今朝方まで任務をこなしていた俺には、絶好のお昼寝日和と相成った。
今も試合を見ているのか、瞼の裏側を見ているのか、正直わからない。
「暁ー？　そろそろ暁の打順だよ。いい加減に起きないと三司さんたちが後で怖いよ」
恭平の忠告には痛み入るが、暖かな日差しと心地いい喧騒が眠気を引き立てる。
でもいい加減にそろそろ起きないとな……なんて決意したその時、
「おーにーいーちゃーんー」
「うお⁉」
背後から聞きなれた声と、柔らかい感触に襲われた。
「眠たいのはわかるけど、せっかくの行事なんだからちゃんとしなきゃだめだよ？」
「それはそうなんだがな。眠気のせいでいまいちやる気が出ないというか……」
「それなら……」
七海はそういうと顔を俺の耳元に近づけ、もう少しで唇が触れるほどに接近する。
「もし、お兄ちゃんがホームラン打って、お兄ちゃんのチームが勝ったら、……キス、してあげる。かっこいいところ、見せてよね」
耳にかかる七海の息遣いとその言葉に、俺の脳は急速に活性化する。
俺は自身のアストラル能力すらフルに発揮し、ボールにバットを叩きつけるのだった。

あなたのいない世界　ＳＩＤＥ　Ｓ／ＳＩＤＥ　Ｎ
（バッドエンド）

☆あなたのいない世界　ＳＩＤＥ　Ｓ

遠くから声が聞こえる。だんだんと鮮明になってきて意識が表層に浮き上がる。

「暁君、聞こえる？　わたしのことわかる？」

体が全く動かない。

かろうじて目を開くと、七海が見える。

……血まみれの七海が。

「……七海⁉　血が！　なんで……」

「もう、大丈夫だから。わたしがついているから」

少しずつ思い出してくる。俺は薬を打ち込まれて能力を暴走させた。

暴れ狂い、人も物もすべて壊した。

今は七海が能力のおかげで意識を取り戻したようだ。

つまり、七海に傷を与えたのは俺。明らかに致命傷ですぐに手当てをしても……。

「七海！　俺はいいから自分の手当てを……！」

「わたしのことはいいの。それに今わたしが手を離したら暁君、また暴れちゃうでしょ？　わたしがついてなきゃ」

「なんで……。お前が暴れる俺を止められるわけないだろ！　もう壊せるものはなかったんだ！　放っておけば勝手に自己崩壊していたはずだ！　なのに、なんで……」

「なんでって、わかるでしょ。お兄ちゃんのいない明日にわたしの居場所はないの」

まっすぐに俺の目を見つめて言う。この行動に微塵も後悔はないというような表情で。

「生まれ変わったらまたお兄ちゃんになってね。大好きだよ、暁君」

その言葉を最後に七海の腕から力が抜けていく。俺を抑えていた

能力も弱まり、意識は再び暗闇へ。
もうすでに自分を取り戻す意味を失った俺は抗うことさえしなかった。

☆あなたのいない世界　ＳＩＤＥ　Ｎ
わたしが駆け付けた時にはもう手遅れだった。
多くの人が倒れ、物が壊されていた。
わたしたちが追っていた事件を考えると暁君の能力が暴走しているのだと想像がついた。
暁君の暴走はきっと脳に直接ダメージが行くからこのままだとまずい。
この場で動けるのはわたししかいない。お父さんたちは到着に時間がかかる。
何よりも、わたし自身が今の暁君を一人にしたくない。
わたしの運動能力じゃどうあっても暁君を止められない。
だからわたしは手を広げて、笑いかけながらゆっくり近づいた。怖くないよ、と。
――そして体が吹き飛んだ。頭を殴られたことに、壁に打ち付けられてから気づいた。
ふらふらする。まっすぐに歩けない。それでも暁君の下へ。今度は真上から叩きつけられる。一瞬意識が飛ぶ。もう痛みなんて感じなくなっていた。
目の前に二本の足があった。抱きしめるように両手ですくい上げると暁君が転んだ。おそらく最後のチャンスにすべてをかける。暁君の頭に手を添えて能力を発動した。
想いが通じたのか、奇跡が起こったのか、暁君が正気に戻った。
はた目には二人並んで寝そべり、わたしが暁君の顔を自分の方に向けているように見えるだろう。
ごめんね。助けが来るまでわたしはもたない。だから暁君も暴走を再開させ、きっと尽きてしまう。でも、これで伝えられる。思いが

けぬ最後になったけどこれだけは。
「生まれ変わったらまたお兄ちゃんになってね。大好きだよ、暁君」
本当はお兄ちゃんじゃなくて恋人でもいいよ。なんて伝える前に終わってしまった。

雨降り緊急連絡／その傘に守られて

☆雨降り緊急連絡

「もしもし、お兄ちゃん？」

「うん、今ちょうど買い物終わったところ」

「ちょっとお願いがあって……」

「ううん、そうじゃなくてね。荷物は平気、一人で持てるから」

「外に出たら、ぽつぽつ降り始めちゃってるみたいだから……。洗濯物、取り込んでおいてくれる？」

「うんお願い」

「えっ、大丈夫だよ。このくらいなら小走りで帰れるから……」

「うん、平気。……ってうわ、やばい、結構降り出した。お兄ちゃん洗濯物急いで！　早く早く！」

「平気？　あんまり濡れてない？　……そう、よかった間に合って」

「うーん、結構濡れちゃいそうだから少し雨宿りしてから帰るね」

「いいって。……聞いてるの？」

「ちょっと待ってれば止むと思うし……」

「もう、わかったよ。うん、ありがとう」

「もう降ってるんだから、急いで走ってこなくていいからね」

「じゃあ待ってるね、ばいばい」

「ふふっ。早く来ないかなー、お兄ちゃん」

☆その傘に守られて

なんとなーく沈んだ気持ち。

何かに失敗したとかではなく、一日を通してうまくいかなかったなぁ、とそんな感じ。

そんなわたしの心を映したかのように、空には分厚い雲がかかり、降り出してきてしまった。

ぽつぽつ、ぽつぽつ、と。

まるでわたし自身を外に広げたみたいに、仕舞い込むわけでも弾け

るわけでもない、まさに微妙な天気。
傘を持っていなかったわたしは、心も体も湿らせながら家を目指す。
今日の晩御飯はどうしよう。今日は何をしてもうまくいかないような気さえしてくる。
なにか簡単なものを……。そうだ、カレーなら失敗しないかな。
お兄ちゃんとお父さん、「おいしい」って言ってくれるかな。
そうしたらちょっとは元気出るかも、なんて。
とぼとぼと、心も目線もうつむいて。
なんだか本格的に降り出しそうな予感――。
「――七海？」
ふっ、とわたしに日が差して、暗澹とした気持ちを吹き飛ばしていく。
「よかった。行き違いにならなくて。雲行きが怪しかったから傘持ってきたんだ」
そう言って暁君は自分で差している傘と、もう一本持っている傘を得意げに見せる。
「本格的に降り出す前に間に合ったな。ほら、帰ろう」
わたしに向かって差し出された傘を、しかしわたしは受け取らない。
今日くらいはわがままになっちゃおうと心の中でひそかに決意する。
「お兄ちゃん、今日はわたし、疲れちゃった。傘も差したくないから……いーれて！」
やがて本降りになった雨も、わたしに届くことはもうなかった。

ななみと月下の詠唱／お披露目会のターゲット

☆ななみと月下の詠唱

時折訪れる天体イベント。本日は「皆既月食」である。

今日ばかりは〝天体観測〟の名目で、学院の敷地内に限り夜間外出が認められている。

生徒たちは思い思いの面々でこのイベントを楽しんでいた。

俺はもちろん七海と共に。……七海の要望でなぜか人気のないところにいた。

「あ、見て見てお兄ちゃん！　ちょっと欠けてきたんじゃない？　すごいすごい！」

「本当だ。欠けてる気がする。ここから赤くなったりするんだろ？　すごいよなぁ」

「うん、すごい。すごく……アガる」

「……七海？」

「――すぅぅ……〝闇の力を秘めし鍵よ、真の姿を我の前に示せ！『封印解除』！〟」

七海がなにか唱え始めた。おそらく子どもの頃から好きなアニメの呪文なんだろうが、胸の前にかざしているのが寮の部屋のカードキーなのでいまいち様になならない。

「――〝黄昏よりも昏きもの、血の流れよりも紅きもの……ドラグスレイブ！〟」

なんだっけ？　聞き覚えはあるけど何の技だったか思い出せない。

その後も、有名どころや多分オリジナルの詠唱を行い、実にご満悦な様子。

そんな愛しい妹に兄として言えることはただ一つ。

「七海、楽しんでいるところ本当に申し訳ないが、声がでかい。遠くまで聞こえるぞ？」

「っ⁉　つ、〝月に代わってお仕置きよ！〟」

どういう返事なのかわからないし、騒いでいて怒られるのは俺たちの方だった。

☆お披露目会のターゲット

コンコン、と部屋の扉が叩かれる。誰か、なんて疑問は当然ない。

この家には俺のほかには二人しか住んでないし、時間を考えれば該当者は一人だ。

「お兄ちゃん、支度終わった？　ちゃんと夏服にした？　もたもたしてると遅刻するよ」

我が家のおかん、じゃなかった、妹の登場だ。

「大丈夫だって、昨日だって何度も何度も念押しされたからな。ちゃんと夏服だぞ」

と、部屋の入口を向くが七海の姿が見えない。いや、正確には顔だけは見える。

「なにコソコソ隠れるようにしてるんだ？　入るなら入ればいいだろ」

「いや、えっとその、うん……。ちょっと恥ずかしくて」

もじもじしながら部屋に入ってくる七海も、当然真新しい夏服に身を包んでいる。

「ど、どう……かな？　変じゃない？　……似合う？」

「どうもなにも、試し着の時にさんざん見たからな。その時にも同じこと聞いただろ」

「そうだけど！　今までと違う格好、新鮮じゃない？」

「女子の制服は去年も見てるからな。新鮮味はあまりない」

「……もう。せっかく新しい服なのに。せっかく一番に見せに来たのに……」

ぼそぼそと小声だったため内容こそ聞き取れなかったが、肩を落として部屋を出ていく妹を見て「乙女心がわかってない！」とよく言われることを思い出す。

「あー七海。その、なんだ。夏服、似合ってるぞ。ばっちりだ」

拙い誉め言葉だが、振り向いた妹の顔を見て兄の務めを果たせたことに安堵した。

ずっと親友／　秘密のツーショット

☆ずっと親友

狭い空間の中、七海ちゃんが不安気な表情で私のことを見つめてくる。

「七海ちゃんはこうゆうの初めて？」

「初めてではないけど……でもあまり経験はないかな」

「そんなに緊張しなくて平気だってば。大丈夫だよ、リラックスして。ほら笑って？」

『いっくよ～。３・２・１・パシャ！』

プリクラの機械音声がタイミングを告げ、写真が撮られる。

その後もポーズや表情を指定されて、パシャリパシャリ。

「さて、写真撮り終わったし盛るよ！　七海ちゃん！」

「盛る……それなら、うん。可愛くしようね、千咲ちゃん！」

さっきよりも自信のある表情でスイスイとパネルを操作していく七海ちゃん。

む、普通にうまいな。プリクラに慣れてないだけで女子力自体はすごく高いもんね。

そんなこんなで完成した、いくつかのプリント紙。

その中で一番気に入った写真。シンプルに文字とハートマークだけを添えたもの。

手のひらに簡単に収まってしまうその中に、大きく書かれた『ずっと親友』の言葉。

それが心の底から嬉しい。写真に写る二人の笑顔が〝ずっと〟を信じさせてくれる。

「ねえ、七海ちゃん。プリ帳とか、アルバムでもいいからお揃いの買わない？」

高校に入ってできたこの大切な親友との思い出はこれからもたくさん増えていく。

だから、まずは最初の一冊目に早くこの思い出を飾りたくなった。

☆秘密のツーショット

目が覚めた時、お兄ちゃんの顔が目の前にあった。

それはまあ昨夜一緒に寝たからなんだけど。んー、お兄ちゃんの腕枕さいっこう。

この寝顔をこの距離で見られるのはわたしだけの特権だという事実が嬉しい。

そーだ。せっかくだから……。

わたしはなるべく体を動かさないようにして、ごそごそと。……あ、あった。

スマホを取り出して構える。おっと、お兄ちゃん寝癖ついてる。直し直しと、よし。

「お兄ちゃーん、はいチーズ」

今をときめく乙女の女子力を侮ることなかれ。寝そべった姿勢でもばっちり撮れる。

……本当は千咲ちゃん直伝の自撮り術あってこそだけど。

お兄ちゃんはまだ眠っているから、当然カメラ目線なんてしていない。

目を閉じたまま、わたしの方を向いているだけ。そしてわたしは渾身のスマイル。

無防備なお兄ちゃんと、お兄ちゃんを独占しているわたしのツーショット。

わたしも寝起きだし、写りがいいとはとても言えない。

だから、この写真は誰にも見せないわたしだけの宝物にしよう。

……でもいつかお兄ちゃんにだけは見せてあげてもいいかも。

見せたらどんな反応するのかな。怒るかな。恥ずかしがるかな。どっちでも楽しそう。

今日は起きたら何しようかな。……なんでもいいや。今はそれよりも。

愛しい人の暖かさに包まれながら、わたしは再び目を閉じるのだった。

思い出計画中／思い出休憩中

☆思い出計画中
連休初日。
やることもなく、日々の慌ただしさを忘れてのんびりしていた時のこと。
「ねえ、暁君。どこか行こうよ」
と、七海が〝お出かけ特集！　観光名所・デートスポットおすすめ一覧！〟と表紙にでかでか印刷された雑誌を持って飛びついてきた。
「あー、そうだな。ちょうど今やらなくちゃいけないこともないし、せっかくの連休だ。遊びに行くのもいいな」
「ね、ね、どこ行きたい？　何かやりたいことある？」
「いきなり言われてもな……。もう少しゆっくり読ませてくれ」
「あ、この景色きれい！　こっちも素敵！　……遊園地や水族館もいいなぁ。バーベキューも楽しそう！　温泉でゆっくりっていうのもいいよね。暁君、どこがいい？」
七海はやけにハイテンションで、ペラペラと雑誌を捲りながらまくしたてる。
「どれも楽しそうだが……七海こそ、そんなに楽しそうに選ぶなら、行きたいところがあるんじゃないのか？　どこに行きたいんだ？」
「え？　うーんと、わたしはね、〝どこへ〟行きたいじゃなくて、〝暁君と〟行きたいの。二人で一緒に行けるならどこへ行っても楽しいに決まってるよ！」
「……そう言われるのは嬉しい……が！　それじゃ場所が決まらないなあ」
「こういうのは、場所選びを悩むのも醍醐味の一つだよ！　二人で素敵な思い出作ろうね、お兄ちゃん」

☆思い出休憩中
温泉と呼ぶには小さく、普通の風呂と呼ぶには大きすぎる湯の中に

七海と二人で入る。
「はー、露天温泉気持ちいい。突発旅行で少し焦ったけど、いい部屋に当たったね」
「そうだな。ちょうど空いている部屋があって助かった。値段も連休中で割高だったけど、まあなんとかなる範囲だったし」
俺たちは今回、連休を利用して観光地の旅館に来ていた。
規模は小さいけれど、観光スポットが近く、部屋に備え付けの露天温泉があったのが決め手だった。
「それにしても癒される。五臓六腑に染み渡るー」
「暁君、お爺ちゃんみたい。でも気持ちはわかるなぁ。今日はたくさん歩いたし」
俺の言葉に軽口を言いながらリラックスする七海。
長い髪を頭の上にコンパクトに纏めたためにあらわになったうなじ。
普段よりも赤みがかった白い肌。そこに浮き上がる珠のような雫が、細い肩からツーっと流れ、たわわな双丘の谷間へと落ちていく。
既に日は沈み、周りの景色はそこまで楽しめない。だからこそ、目の前の完成された美が一際輝いて、目が離せない。
「ちょっと暁君。目がすごくエロくなってる。……明日もいっぱい観光するんだよ？」
「わかってる。でも旅行って観光だけじゃないだろ？　俺たちの旅行はこれからだ！」
「なに頭悪いこと言ってるの。そういうのは温泉をもう少し堪能してからね？　あと、ちゃんと加減はしてよね？　明日もたくさん思い出作るんだから！」

傘の中の幸せ／忍者七海

☆傘の中の幸せ

梅雨の季節に入り、気が滅入る日が増えた。

そんなときでも唯一の楽しみがある。

それは相合傘。七海と一つの傘の中で肩を並べて歩くささやかな幸せ。

しかし、それに慣れてしまうとどうしてもさらに欲深くなってしまう。

「七海、ちょっとこっち向いて」

「え、なに？　お兄ちゃ――」

「――チュッ」

こちらを見上げた七海に不意打ちのキスをした。

口を離すと、目を見開き頬を真っ赤に染めた七海が文句を言ってくる。

「ちょ……と、ここ外だよ⁉　何してるの！」

「大丈夫だって。雨で視界は悪いし、そもそも少し傘を下げれば絶対に見られない」

そして、声を荒げる七海にもう一度、唇を重ねる。

「ほらな？　大丈夫だろ」

「そういう問題じゃ……もういい！」

七海はぷいっと頬を膨らませて先に歩き出してしまう。

とはいえ、二人でひとつの傘を使っているし、その傘は俺が持っているので離れはしないのだが。

「……ねえ、暁君」

隣に並んだ俺を七海が呼ぶ。その声に振り向くと――チュッ、と。

「ふふ。驚いた？　やられっぱなしじゃいられないからね。お返し！」

☆忍者七海

わたしは情報局特別班所属の諜報員だ。
コードネームはレヴィ9。
本来はサポート役だったとしても、ターゲットの尾行くらい造作もない。
今は真昼間でしかも学院内だから人目が多く、特班の制服は迂闊に使えない。
それでも気配を消し、物陰に隠れることで気づかれることなく目標を観察することができるのだ。
そう、まさしく現代の忍者のように！
お兄ちゃんは今、周防先輩と一緒に歩いている。残念ながら会話までは聞こえない。
む、前方から来た女子生徒と喋りだしたぞ。
偶然すれ違っただけのようだけど、ずいぶん楽しそうに喋ってる様子。
あの女子生徒、見覚えがあるな……。
確かお兄ちゃんのクラスメイトの子だ。
女子生徒も周防先輩もお兄ちゃんも全員笑っている。
というかあの子、お兄ちゃんとずいぶん距離近くない？　しかもお兄ちゃんを見る目がちょっと違う気がするんだけど。
ただの友達に向けるような目の輝きじゃないよね？
……要チェックだ。あとでリストにまとめてしっかり覚えておかないと。
もうしばらくの間談笑してからお兄ちゃんたちはようやく解散し、また歩き始めた。
やっぱり、お兄ちゃんの周りはしっかり注意しないといけない。
尾行は継続だ！

「ねえ暁。後ろのあれ、七海ちゃんさっきからなにしてるの？」
「俺にもさっぱりわからん。でもまあ、可愛いからしばらく放っておこうと思う」

サノバウィッチ／椎葉紬

「お約束」／体操服

☆「お約束」

「お待たせ柊史くん、待った？」

「全然、俺も今来たところ」

待ち合わせ定番のお決まりの言葉からデートが始まる。そして、俺が次の「お約束」を言おうと思い彼女の格好に目をやるとそれが見たことのない服だと気づいた。

「ふふ、今日のために新しい服を買ったんだ。どう？」

紬は見せつけるようにその場でくるりと回った。花が咲くように白とピンクのスカートが浮き上がりまぶしい脚が視線を呼び込む。ウエスト部分をタイトに締めたくびれと胸元部分にあしらったフリルが彼女の女性らしさを強調する。最後に一回転してこちらの様子を窺うその笑顔に紬以外の存在が視界に映らなくなった。

「あ…あれ？どうかな、似合う？」

俺の反応の薄さに紬が心配そうに意見を求めてくる。その声にはっとして慌てて言葉をまとめる。

「うん、すっごく似合ってる。見惚れてた。かわいいよ」

「よかった。この服見せるのは柊史くんが初めてなんだ。そっか、見惚れちゃったかぁ」

ふふふ、と満足そうに笑う。俺も「お約束」を果たせたことに安堵する。

「じゃあ行こうか。今日はどこに連れて行ってくれるの？」

そういうと紬は俺の手を引いて歩き始める。俺はその手をしっかり握り返しながら、きっとどこに行ったとしても今日は紬以外は目に入らないだろうなと考えていた。

☆体操服

夏の日差しが照り付ける、どこに行っても日差しからは逃げられない校庭の隅で一人座って休憩していた。なんで海道たちはあんなにずっと動いていられるのだろうか。

今は正午前。昼休み直前の体育の授業。こんな暑くちゃやってられないとうなだれていると、強い日差しのおかげでやけにはっきりした影が一つ近づいてくる。

「お疲れ様、保科君。大丈夫？」

「ああ、椎葉さん。お疲れ、大丈夫だよ。ちょっと暑さに打ちのめされてるだけ」

言い返しながら椎葉さんの格好に違和感を覚え、まじまじと見る。

「あ、体操服…」

そうか、体育はいつも女子とは別の場所でやっていたから体操服姿が新鮮なんだ。

「うん。体育だからね。体操服は女の子っぽくはないけどみんなと同じ格好ができるから、体育は苦手でも体育の授業は好きなんだ」

そう椎葉さんは笑う。確かにあたりを見れば他の女子もみんな同じ格好をしていた。

しかし。女の子っぽくないは絶対に嘘だろう。薄い生地のシャツが汗を吸って張り付いている。さすがに学校指定の服だけあって透けて見えはしてないけど、その格好は十分に〝女の子らしさ〟を強調していた。ちょっと直視できない。

「保科君？どうかした？やっぱり具合悪い？」

自分のことを邪な目で見る俺に彼女は心配そうに言う。この天使をせめて他の男に見せてたまるかと、うまくはないおしゃべりでどうにかこの場につなぎとめようと決心した。

にゃーにゃーにゃー／予約

☆にゃーにゃーにゃー

にゃーん、と下校中の俺たちの前を猫が通りがかる。

「あ猫。チッチッチッチ…」

と椎葉さんが猫を呼ぶ。そして見事に首元をゴロゴロすることに成功していた。

「すごいな……。猫、好きなの？」

「うん好きー。かわいいよね、癒される」

声こそ穏やかだか、手の動きがすごい。右手と左手で同時に違う箇所を撫でまくる。

「家で飼ってみたい気もするけどウチにはアカギがいるからね、ちょっと難しいんだよね。そうだ、保科君も撫でてみなよ。人懐っこい子だよ」

と言ってくれたのでせっかくだから撫でさせてもらう。と、思ったが俺がほんの少し首元に触っただけでタッと走り逃げ出してしまった。

「残念だったね…。保科君は猫、好き？」

「特別好きなわけでもないけど今のはちょっとショックかも」

そっか、と椎葉さんが考え込む。どうしたのかと待つと、じゃあさ…、と両手を軽く握り、右手を頭の横へ左手を胸の前へ構えて、

「にゃ、にゃーん、元気出して、にゃーん……」

……と。猫ポーズで慰めてくれた。一瞬呆気に取られてしまった。そしてそのかわいらしい格好を顔を真っ赤にしながら真面目にやっていることに耐え切れず噴き出してしまう。

「な！　ちょっと励まそうとふざけただけなのにそんな笑わなくても！」

☆予約

「どうしたの？　それ」

紬が紅く輝く宝石を模したおもちゃの指輪を、じっと見つめている。
「職員室に用があって、そのときに久島先生にもらった……というか押し付けられたんだ。正直もらっても仕方ないんだけど、アカギが好きだし持って帰ろうかなって」
「なんでまたそんなの持ってたんだあの人……」
ねー。と軽く返事が返る。
「そういえば知ってる？　指輪って左手の薬指以外にも意味があるんだよ」
顔をあげて紬が問いかけてくる。
「確か、そこの本棚に……、あっ！」
椅子から身をよじった弾みで指輪を落としたようで、コツっと軽い音が聞こえる。彼女は慌てて拾おうとするが、その前に声をかける。
「座ったままでいいよ、こっちに転がってきたから。……うん、そのまま座ってて」
オレは指輪を拾い上げ、机をまわって紬の目の前に立ち、そしてひざまずく。
「紬、手をこっちに。右手がいいかな」
キョトンとしたまま手を差し出してくる。オレだってこの部室には紬より前からいるんだ。その本だって知っている。右手の薬指に込められた意味――。
「今はここで。次の時には反対側に本物をプレゼントするから」
そう言って彼女の白くて細い指に、恋人の証をはめ込んだ。

甘えたい気分／ご挨拶

☆甘えたい気分

すごく疲れた。今すぐに泥のように眠りたい。

なんて顔をしていたら絶対に紬に心配をかけるから気をつけないと。

そう考えながら玄関を開ける。

「おかえりなさい柊史くん、今日も一日お疲れ様。ご飯にする？　お風呂にする？　そ・れ・と・も……」

――ガバっと。

だめだった。紬の顔を見た瞬間、直前の決意など忘れて胸に飛び込んでしまった。

そんなオレを紬は優しく労ってくれる。

「本当にお疲れ様。もうすぐご飯できるからお風呂はいってきちゃって？　お風呂から上がってくる頃にはちょうど出来上がると思うから。今日の晩御飯は柊史くんの好きなものだよ、なんだと思う？」

「紬」

紬の問いかけにオレはノータイムで答える。

「え？　もー、ご飯だってば」

「紬」

「聞いてるの？」

「つむぎ……」

オレは壊れたように彼女の名を呼びながら彼女の胸に顔を沈める。

「……はぁ。仕方ないんだから。ちょっとの間だけだよ？」

と紬はオレのしたいままにさせ、そっと頭を撫でてくれる。

俺たちの間にまだ子どもはいないけど、彼女の母性は既にとどまることを知らかった。

☆ご挨拶

良く晴れた空の下を二人で歩く。

なんて言うとまるで海岸沿いでも散歩しているように聞こえるが、ここはなんてことはないただの街路である。

「本当に着いてくるの？」

「着いてくるも何も、ワタシが連れ行って、って言い出したことでしょ？」

「別に楽しいことはないと思うよ」

「楽しいことだとは思ってないけど。それでも、ご挨拶はしたいからね」

「そこまで気にしなくてもいいのに」

「こう言っていいのかわからないけど、せっかくの機会だからね。さすがにお盆とかに着いてきちゃうと本当に邪魔になっちゃうから。だから今日はちゃんと〝未来のお嫁さん〟って紹介してよね」

「わかってるよ。ちゃんと紹介する。……っと着いた。先にここで花買って行かないと」

「なにを買うかは決まってるの？」

目的地への道すがら、立ち寄った花屋で品定めをするオレに、紬は優しく問いかける。

紬だってわかっている。こんな日に買う花はそれしかないのだと。

「仏花として何が正しいのか、オレはよく知らないけどね。でも、今日ならこれしかないよね」

オレは、陳列されている中からなるべく鮮やかなものを選び、店員に声をかける。

――一束のカーネーションを大事に抱えながら。

おはよう朝のラブコール／帰り道は手を繋いで

☆おはよう朝のラブコール

「もしもし？　おはよう」

「もしかして、今起きたところ？　着信音で起こしちゃったかな、ごめんね」

「ううん、なにも約束してないよ。寝坊じゃないから大丈夫」

「えーとね。朝、起きてみたらいいお天気だったから……。一緒にお出かけしたいなーって。……ダメ？」

「本当？　やった！」

「行きたいところ……というか、したいことがあって」

「せっかくいい天気だからね、外でお弁当食べたいな。お花見しようよ。この前ちょうどね、アカギがお花見によさそうで人があまりいない穴場を見つけたんだって」

「ああ、アカギはね、いい天気だからって早くにどこか遊びに行っちゃった。だから、……二人きり、だよ？」

「場所は大丈夫。ちゃんと聞いてあるから」

「うん、じゃあお弁当用意していくね。あでも、今から準備するからちょっと遅くなっちゃうかも……」

「そうだね、うん。13時にいつもの場所で」

「……ワタシも楽しみにしてるよ」

「うん、じゃあまたあとでね。ばいばい」

「よーし、張り切って準備するぞ！」

☆帰り道は手を繋いで

多くの人が駅の狭い通路を交差する。黒いビジネスバッグを右手に持ち、その流れの一部になると、「ああ、自分も遂に社会の歯車の一つになったんだ」と実感する。

社会人となり、初めて一週間ぶっ通しで勤め切って大いに疲れた。おまけに今日は新人の癖に残業までして、もしやブラックか？　と不

安になる。
一刻も早く帰りたいけど、飯の支度をするのも面倒だし、何か買って帰ろうか――。
「――だーれだ？」
背中に柔らかい感触を感じるのと同時に、唐突に視界が暗くなる。
驚いて振り返ると……そこにいたのは――天使だった。
「天使とか大げさな……。お仕事、お疲れ様」
そういうと紬はにこりと笑って、手に持っていた買い物袋を見せてくる。
「ご飯まだだよね？　作ってあげるから一緒に食べよ？」
「それはありがたいし喜んで。でも紬も仕事上がりだよね、疲れてない？」
「ワタシだって疲れてはいるよ。でも、だから一緒に食べたいの」
「……そういえば、オレ帰りの時間とか伝えてないよね？　もしかしてずっと待っててくれたのか？　悪い、荷物持つよ」
「いいよ。そうしたら両手塞がっちゃうでしょ。ほら左手はこっち」
紬がすっかり冷えてしまった手で、オレの左手を握り歩き始める。
「こうしてると疲れなんて忘れちゃうね。ねえ、明日のお休みはどうしようか？」
冷たいはずの手からは不思議と温かさが流れ込んできて、疲れなんて消えてしまった。

喫茶ステラと死神の蝶／汐山涼音

私を呼ぶ声／壁ドン

☆私を呼ぶ声

日中の賑やかさは欠片もなく、ただ手元の調理の音だけが耳に届く。バイトの子たちは既にみんな帰り、今店に残っているのは新作メニュー検討のため一人鍋を振るう私と

「涼音さん、ちょっと」

私の手伝いを買って出てくれた昂晴だけだ。

新作メニューはアイデアだけでは完成しない。何度も何度も試作品を作り微調整を加えつつお客様に提供できる基準をクリアしなくてはならない。そのために自分で何度も食べるけど、こうも同じのばかり食べていると味の良し悪しがわからなくなってくる。だから手伝ってもらえるのは素直にありがたい。

「？…涼音さん？」

私は火の通り具合を見ながら火力の調整を行う。焼きすぎても焼けてなくてもダメ。自分自身の納得できるポイントを手探りで見つけ出す。おっと、ここでアレとソレを加えて、と。

「涼音さんってば、聞いてくださいよ！」

「ん？ごめん、調理で聞こえてなかった。なに？昂晴」

嘘だ。しっかり昂晴の声は聞こえていた。調理音がうるさいのは事実だけどそんなの昂晴も分かったうえで声を出している。

ただ、私の名前を呼ぶ声が嬉しくて愛しくて。つい聞こえないふりをして何度もそれを求めてしまう。誰にも言わないささやかな私の幸せ。

☆壁ドン

「壁ドンってしたことある？もしくはされたこと」

「なんですかいきなり。どっちもないですよ」

閉店後、キッチンの片づけ最中に涼音さんが話を振ってくる。
「…いやあるでしょ、私に。壁ドンってか押し倒しだけど」
「あれは事故です。というか、ならなんで聞いたんですか」
「いやね、漫画とかでは見るけど実際やられたらドキドキするものなのかなーって」
「実体験がないから何とも言えないですけど、あれのドキドキって恐怖カウントだと思うんですよ。自分より大きな相手に逃げ場なくされて迫られたら心臓バクバクですよ」
なるほど、と涼音さんは考え込む。
「じゃあさ、君より背が低くて力も弱い私が壁ドンしてもなんとも思わないわけだ」
「まあ怖くはないですね。…あ嘘、包丁はしまってくださいって。そもそも涼音さん、壁ドンっていっても届かないでしょ？」
「…上等。年上をなめるな！」
そういうと俺の肩あたりをどつく。一歩引いて耐えようとするが何かが足にぶつかって背中から倒れ込む…前に壁に背がついた。そして、ドン。
「どーよ昂晴。ドキドキした？」
転びかけたパニックと突然きれいな顔が目の前に至近距離にあるせいで涼音さんのことしか考えられなくなる。なるほど、壁ドンって効果あるんだな。

眠れない夜は、キミと／寒空おしかけメッセージ／エイプリルフール

☆眠れない夜は、キミと

「ごめんね、寝てた？」

「いや、大丈夫です」

まだ起きてた、と言わないあたりやっぱり寝ていたのだろう。当然だ、今日も遅かったし明日も早い。

なかなか寝付けなくって彼に電話したのは〝魔が差した〟というところだろうか。

寝付けない理由はきっと「不安」だろう。今日は私らしくもないミスを何度もした。その度に彼に助けてもらって事なきを得たけど、メンタルが妙に弱っているのを感じる。

店で助けてもらって、また彼に甘えてるなんて年上の大人としてはすごく情けない。そう考えると自分自身が空虚に感じて、布団の中で身を丸めてもどこか冷たく感じる。

「今からそっち行きましょうか？」

「ううん、平気。そこまではいい」

何が平気なものか。こんな時間に電話なんかかけて覇気なく話していれば昂晴が心配するのはわかっているのに。わかっていてそれでも甘える狡猾さに自分が嫌いになる。

「涼音さん」

彼が私を呼ぶ。これ以上迷惑をかける前に切らないと。

「愛してます、涼音さん」

寝ぼけて、いつもより照れも駆け引きもないその言葉で私の身体に熱が灯る。

ああ、もうばか。嬉しくてさっきよりも眠れなくなっちゃった。

☆寒空おしかけメッセージ

「あ、もしもし？」
「うんお疲れー。今からキミん家行くから」
「は、なに。嫌なの？　私が来るの」
「うん、よろしい。お酒とかおつまみとかいろいろ買ってきたけど、何か欲しいものはあった？」
「それも買ってあるよ。よかったよかった」
「キミの好みだって、私はばっちり把握してるからねー」
「え？　いいよわざわざ。寒いんだから部屋で待ってなって。荷物だってそんなに多くはないし」
「もー本当、キミは私のこと大好きなんだなー」
「私？　聞かなくてもわかってるでしょ、言わせないでよ」
「あーもう、はいはい」
「私もちゃんと、キミのことが大好きだよ」
「言わせておいて照れてるんじゃないよ。こっちまで恥ずかしくなってくるじゃんか」
「もう部屋出たの？　忠犬か、キミは」
「こんな彼女想いの恋人を持てて、私は幸せ者だね」
「はいはい、もう近くまで来てるからね。慌てない慌てなーい」
「あ、見えた見えた。おーい！」

☆エイプリルフール

お店がお休みの今日、私は昂晴を部屋に招いて二人でのんびりと過ごしていた。
「ねー、昂晴」
「なんです？」
何気ない呼びかけに、彼が返事をする。――今から爆弾を打ち込まれるとも知らずに。
「あのね、……できた、みたい」
「……は？」
「だから、……できたみたいなの」

私はお腹を押さえながら静かに繰り返す。
そして昂晴は、
「……っ、絶対に幸せにします。二人とも俺が、絶対に……」
大粒の涙を流しながらそう言ってくれた。
嬉しい。彼が泣いてくれたことが。幸せにすると言ってくれたことが。
……だから今、とても申し訳ない。
「あの、昂晴。……あれ」
私は指さして言う。壁にかけてあるカレンダーを。
四月一日。本日はエイプリルフールなり。
「ご、ごめんね？　本当は、まだできてないです」
昂晴は拗ねてしまったけど、いつか来るその日を私は待ち遠しく思った。

私を温めて／見た目も中身も

☆私を温めて

四月に入り、肌寒く感じることも少なくなってきた。

――だから。

「いい加減にこたつを片付けようと思います」

「え、嫌」

しかし涼音さんに即座に反対された。

「もうだいぶ暖かくなったし、もうあんまり入らないでしょ。現に今も使ってないし」

「それでもこたつ様は必要。片付けるなんて、いーやーなーのー」

「なんで駄々っ子になってるんですか。片付けますからね」

そう宣言し、俺はまず最初にこたつの天板を外すべく中腰になる。

――その時。

ガバっと。涼音さんが後ろから首に腕を回すようにして抱き着いてきた。

「ほーら邪魔してやるー。うりうりー」

「うわ、涼音さんあぶな……。っていうか涼音さん……」

「ん？　当ててんのよ」

「いや当たってる感触全然な……。ギブギブ、首、絞めないで！」

ほどなくして腕が緩んだ隙をつき、俺は背中の涼音さんごと天板を持ち上げる。

「ちょ、わ、足浮く！　こわ！」

涼音さんは落ちないように腕で体を固定し、耳元で囁いてくる。

「片付けちゃうなら、私が寒がらないようにしっかり温めてよね、昂晴」

☆見た目も中身も

繰り返す毎日。そんな普通で平凡な日常の中にも謎は発生する。

「あれ？　おかしいな確かに買ってあったはず……」

「ん？　昂晴、どうかしたの？」
　休日の昼下がり、俺が冷蔵庫の中をあさっていると涼音さんが声をかけてくる。
「我が家の冷蔵庫にしまってあった俺のプリンが消失するという事件が発生しまして」
「へえ……。よろしい。その事件、私が見事に解決してあげよう」
「眼鏡と蝶ネクタイいります？」
「そうそう、見た目は子ども、中身は大人、その名は……。って、やらすんじゃない。私はちゃんとした大人だよ！」
「はいはい。それで探偵さん、せっかくなので推理をお願いします」
「ったく、調子のいい……。えーと、現場観察ね。まずキッチン回りから。うん、片付いてるね。なんならいつもよりも」
「昨日涼音さんが飲み散らかしたのを、今朝俺が一人で片付けたんですよ」
「昨日は君の帰りが遅かったのがいけないんだぞ。だから私は一人寂しくお酒を飲んで、ふと甘いものが欲しくなったから……冷蔵庫から……プリンを……。……そうだ、それで食べてから昂晴のだって気づいて容器だけ捨てて証拠の隠滅を……」
　涼音さんは途中から何かに気づいたようにぼそぼそとつぶやく。
「やってることが完全に子どもなんですが」
「……今から涼音さん特製スペシャルプリン作ったげるから許して？」

仕返し／戦場の給水タイム

☆仕返し

連休を利用して、お店のみんなで河原にバーベキューに来た日のこと。

メインのバーベキューを終え、昂晴が機材の片づけを買って出てくれた。

「片付けありがと昂晴。お肉もおいしかった。ずいぶんと手際が良かったね」

「満足してもらえてよかったです。練習しておいた甲斐がありましたよ」

「練習？　したの？」

「はい、前に宏人たちと。リア充になった時の予行演習だー、って」

「成果を発揮できて何よりだ。それで？　キミ、食べてる間もずっと焼き係だったけど、今も片づけを買って出ちゃってよかったの？　あっちでみんなと遊ばなくて」

「いいんですよ。俺は希たちが笑っているのを見るのも好きですから」

「へー、可愛い女の子たちの可愛いところを見るのが大好きだと」

「もちろん、一番好きなのはあなたが笑っている姿ですよ、涼音さん」

片づけを終えた彼はそう言いながら、冷たい苺を私の口に押し込んでくる。

「みんなを呼んで、デザートでも食べましょう。冷やしといたからおいしいでしょ？」

全く。私以外の女なんて知らないくせに。どこでこんなことを覚えてきたのか。

顔が熱くてたまらない。

こんなところをみんなには絶対に見られたくない。

だから。みんなを呼ぼうとしている昂晴の襟を掴み、こちらに引き寄せる。

「――チュッ。……本当、おいしい。ねっ、今度は二人きりで出かけよ

うね」
これでみんなを呼べるまい。
私は彼の顔を見て時間稼ぎが成功したことを確信した。

☆戦場の給水タイム
学校やら外せない用事やらで本日の喫茶ステラ、絶賛人手不足中。
俺や涼音さんのキッチン担当もこんな時にはフロア業務に駆り出される。
そしてなぜかそんな日に限って――。
――いちゃいちゃイチャイチャいちゃイチャイチャいちゃ……。
店内のあらゆる席でカップルがいちゃついてやがる。
店内の体感温度は爆速上昇中。
「くそぉ、人のいちゃつきがこんなにストレスになるとは。普段からフロアやってる希たち、ハート強すぎだろ……」
「耐えろ、耐えるんだ昂晴。私たちにできることは増援が来るまでせっせと爆弾（料理）を作って、せっせと敵軍（お客様）に放り込むことだけなんだから……」
そう言い残して涼音さんは作り立てのパンケーキ片手に出陣していく。
ご武運を。
さて、俺もしっかり自分の仕事を全うしなくては。
フライパンを温めつつ、材料の準備をする――と。
涼音さんがズンズンと勢いよく戻ってきた。案外元気そう？
「――昂晴」
名を呼ばれたかと思えば、次の瞬間にはグイッとネクタイを掴まれ引き寄せられた。
「んっ、んん……、ぷはぁ」
重ねるだけよりも深いキスだった。
突発的犯行の犯人は反省も後悔もない表情で言う。
「ふぅ、満足。こうも暑い日には水分補給しなきゃやってられないよ

「ね？

新しいお話
キミに似合うと思う／月よりも星よりも

☆キミに似合うと思う

今日のデートの待ち合わせはワタシの家。

柊史くんが「迎えに行くから家で待っていてほしい。着替えやすい服装で」と言うので、おとなしく待っている。

それにしても、「着替えやすい」服装の意味は何だろう。

服装の指定なら普通「動きやすい」とか「汚れてもいい」とかあたりだと思うんだけど。

……もしくは、おうちデートなら「脱ぎやすい」服装とか……。

そこまで考えて顔が熱くなってくるのを自覚したころに呼び鈴が聞こえた。

「はーい。いらっしゃい、柊史くん。どうぞ上がって」

「お待たせ、紬。お邪魔します」

そう言って靴を揃えて家に上がる柊史くんを、ワタシは自分の部屋へ案内する。

「今日はこれからどうするの、お出かけはするんだよね？　あとその荷物は……？」

「うん。せっかくだから外に出て見せびらかしたいね。……これは、その……」

柊史くんが言いよどむ。かれこれ数十秒はため込んでから、ようやく口にしてくれた。

「……偶然、可愛い服を見つけて。買ってきたんだ。これを着てデートしてほしい」

顔を真っ赤に染めて、綺麗に包装された袋を差し出してくる。

「……きっと、キミに似合うと思う」

多分、今ワタシの顔は柊史くんに負けないくらいに真っ赤に染まっていると思う。

彼がワタシに着てほしいという服。どんなものか気になって、その

贈り物が嬉しくて、ワタシは逸る気持ちを必死に抑えながら丁寧に包装を解いていった。

☆月よりも星よりも

仄暗い光の中、まばらに散る人を避けながら二人で歩く。

「紬、足元気を付けて」

「わかってるって。それに、こうして手を繋いでるんだから転んでも安心でしょ？」

紬は得意げに繋がれた手を持ち上げる。

本日のデートは水族館に来ていた。

連休中だけあって人が多いように感じるが、それでも移動に困ったり水槽が見えなくなったりするほどではない。

ゆっくりと進んでいくと、少し広いスペースに出た。

そこでオレたちは、無数の小さくて揺れ動く光に包み込まれる。

「うわ、すご。……これ、全部クラゲなのか。なんと言うか……幻想的な感じだ」

「……そうだね、驚いた。こんなに綺麗だなんて。……クラゲって〝海の月〟って書くみたいだけど、これだけいっぱいいると……」

「〝月〟というよりも〝星空〟って感じだ。……クラゲに感動するなんて、何か悔しい」

「あはは……ちょっとわかるかも。でも、……本当にすごい」

そう言って紬は繋いでいるのとは反対の手で水槽に触れ、顔を近づける。

オレは、そんな彼女に――星々の淡い光に照らされて、深海の中で一人静かに煌めく彼女に――目を奪われ、心を射抜かれる。

紬を連れてどこへでも行きたいと思う。

きっとその度にオレたちは思い出を増やし、その度にオレは彼女のその横顔に、見惚れることになるのだろう。

兄妹の昔／恋人の未来

☆兄妹の昔

日が沈みかける夕暮れ時、一つのいびつな影がふらふらよろよろと歩いている。

「お兄ちゃん、平気だよ。わたし自分で歩けるよ？」

「だめだ。さっき試しに歩いた時に顔をしかめてただろ。おとなしくしておけ」

お兄ちゃんは自分のランドセルを背中ではなく前に持ち、空いた背にわたしを背負ってくれている。それもこれも、わたしがドジして転んで足を挫いてしまったから。

それを聞きつけたお兄ちゃんが半ば強引にわたしを背負ったのである。

実際ありがたいしとても嬉しいんだけど、正直なところちょっと怖い。

わたしと二人分のランドセルの重さを支えているから、いつ崩れてもおかしくない。

ぜぇはぁと息を切らしながら、ゆっくりゆっくりと一歩ずつ進む。

当然なのだ。大人と比べてあまりに小さすぎる背中で。

その背中に自分のすべてを預けてしまっているのが申し訳なくて。

「わたし、家までだったら我慢できるから」

「いいから。任せとけ」

ぐっ、とわたしを背負いなおし、また歩き出す。その強情さに甘え心が芽生えた。

「……ねえお兄ちゃん、もしわたしが怪我してなくてもおんぶしてくれる？」

「してやる。今度するときにはもっと体力つけて安心させてやる」

「そっか。じゃあまたお願いするね。……ありがとう、お兄ちゃん」

今はまだ頼りなくも頼りたい背に身をゆだね、不規則に揺れながらわたしたちは帰る。

☆恋人の未来

まだ日が高いお昼時、一つのいびつな影が学院内を動いている。

「ちょっと、自分で歩けるってば。人に見られたら恥ずかしいから！」

「だめだ。油断して悪化したらどうするんだ」

わたしはうっかりドジをして、足を捻り痛めてしまった。

そのことに気づいた暁君が半ば強引にわたしを背負ったのである。

「……なんだか懐かしいね。昔もこんなことあった気がする」

「そうだったか？　というかおんぶくらいだったらちょくちょくやってるだろ」

「そうだけど。……あの頃のおんぶは怖かったなぁ。今ではこんなに安心できるのに」

「そりゃあ成長したし鍛えてるからな。今ならどんなわがままでもどんとこいだ」

「……いいの？　なんでも？　本当に？」

「いやに念押しするな。俺にできることならなんでもしてやる」

「じゃあさ。お姫様抱っこ、して欲しい」

「は？　今？　なんで？」

「今じゃないよ。いつかの話。わたしは白い豪奢なドレスを着て、暁君はきっとカッコいいタキシード姿で。花びらが舞う中でみんなに祝福してもらうの。そこでしてよ」

「それって。……いいよ。してやる。任せとけ」

「ふふ、楽しみにしてる。……ありがとう、お兄ちゃん。大好き！」

頼れるようになった背ではなく、その腕で抱きしめあう未来へわたしたちは進む。

エスコート／交換こ

☆エスコート

とある休日の昼下がり。いつもより気合を入れたオシャレな店でのランチタイム。

「なんだかすごく雰囲気のいいお店だね。今日ってなにか特別な日だったっけ？」

「いや、特にそういうわけじゃないが。たまにはいいだろ、こういうのも」

「まあね、実際嬉しい。わたしのためにしてくれてることだもん。それにしても、よくこんなお店知ってたね」

「そこはまあ色々調べたりしてだな……。今日のデートのテーマはクラシカルだ。大人でスマートな最高のエスコートを期待していてくれ」

「おお……！　暁君がいつになく自信満々だ。でーも、それならもっと気を付けて」

「なにが？」

「口元。食べかすついてるよ。せっかくかっこよく決めてくれてるのにもったいないよ」

そう言って七海は紙ナプキンを一枚取り、向かいの席から腰を上げ手を伸ばしてくる。

「ちょっと動かないで……はい、とれた。もう、しっかりしてよね」

満足気に笑う七海に俺はつい目が引き寄せられる。――笑顔の下にあるその光景に。

胸元の大きく開いたシャツから、たわわな果実が大胆に顔を見せている。

「……暁君？　どこ見てるのかな？　全く、大人でスマートなエスコートはどうしたの」

「悪い。つい目が離せなくなって」

「大人のお楽しみは後に取っておいてよね。今は素敵なデートをお願いね、お兄ちゃん」

☆交換こ

橘花学院に転入して早数週間。今日は親睦会の名目でパフェを食べに来ていた。

メンバーは俺、七海、壬生さん、恭平の四人。

元々は七海と壬生さんで行く予定だったところを、人見知りの七海に気を使って壬生さんが俺のことも誘ってくれた。そして俺が男一人を嫌って恭平に声をかけたのだ。

四人全員の前にパフェが並ぶ。……なぜか四つよりも多いのだが、差分は全て恭平の前に並べられたから何も言うまい。

早速みんなパフェに手を付け始める。うん、評判になるだけあってとてもおいしい。

「ん～！　苺の甘味と酸味が丁度良くておいし～い。あ、暁君、暁君のも一口頂戴！」

「自分のがあるだろ。おとなしくそっちを食べてろ」

「だって味が違うじゃない。そっちのチョコソースのも食べたい。私の一口あげるから！　はい、あーん」

「あーん。……仕方ないな。ほら、あーん」

「あーん。うん、こっちのもおいしい！　暁君もう一口！」

「……なんていうかさ、わかってはいたけど二人とも仲良いよね。兄妹以上に」

「……ですよね。もしかして私たちお邪魔だったりしますかね」

「な⁉　そんなことないですから！　これは子どもの時からの癖で！」

「はいはい、わかったから。ほら七海ちゃん、今日のメインは七海ちゃんと私の仲を深めることだよ。私とも交換こしよ！　はいあーん」

夏風邪／ハート付きのメッセージ

☆夏風邪

七海が珍しく体調を崩してしまった。

おそらくはただの夏風邪。気温の変化に体がついていかなかったのだろう。

熱もさほど出ていないし、学院の保健医もきちんと寝ていれば問題ないと言っていた。

……まあ、それはそれとして心配は心配なのである。

「七海、俺だ。……入るぞ？」

寮の部屋をノックしても返事がないので勝手に扉を開ける。……開いてしまう。

「……あ、暁君。どうかしたの……」

予想よりもぐったりとした様子の七海がうっすらと目を開いた。

「どうもなにも、心配だから様子を見に来たんだ。それより鍵かけないのは不用心だぞ」

「ありがとう。鍵は千咲ちゃんが様子見に来てくれるって言うから開けておいたの」

「そうか。まあ学院内だし忍び込む輩もいないか。……何かして欲しいことあるか？」

「ううん、平気。……あ、やっぱり一つ。わたしが眠るまで手を握っててほしいな」

「別に構わないが、今日はやけに素直だな。普段だったらもう少し照れそうなのに」

「ふふ、病気にかこつけて思い切り甘えてるの。たまにはいいでしょ？」

「俺としてはいつでも思い切り甘えてほしいんだがな。ほら、手」

「ん。ありがと、お兄ちゃん」

それからしばらくして、七海が静かな寝息をたて始めても俺はその手を離す気にはなれなかった。

☆ハート付きのメッセージ

七海と二人で他愛ない話をしながら歩いていた時のこと。

「あ、メッセージ。千咲ちゃんからだ。……むぅ」

「どうかしたのか？　昨日は壬生さんと出かけてたんだよな、喧嘩でもした？」

「え、ううん。喧嘩なんてしてないよ。昨日は一緒にクラスで話題のお店に行ったんだ」

「じゃあ不服そうな顔してどうしたんだ。楽しくなかったのか？」

「楽しかったよ、一応。苦い……というか辛い思い出もできたけど」

「……？　おっと、俺も着信だ」

「千咲ちゃん、メッセージいつも可愛くて楽しいんだけどたまに意地悪……」

「あー、確かに壬生さんのメッセージは読んでて楽しいよな。ハートマークとかたくさんあるし」

「だよねぇ。……？　待って？　千咲ちゃんからハートマークもらってるの？　しかもいっぱい⁉　どういうことなの、ちょっと見せて！」

そう言うと七海は俺の手から端末を奪い取ってしまう。

画面にはちょうど壬生さんからのメッセージが表示されている状態だ。

『先輩！　お裾分けです！　激辛ラーメン食べて顔真っ赤にして涙目で悶えてる七海ちゃん、めちゃくちゃ可愛くないですか♡♡♡♡♡』

「んなっ……！　千咲ちゃん、暁君にも昨日の写真送っちゃったの⁉」

「良い友達持ったな、七海」

そしてミノムシへ／インプリンティング

☆そしてミノムシへ

妹だとか恋人だとかの贔屓目を抜きにしても、暁君はかっこいいと思う。

整った顔立ち、引き締まって筋肉質な体、不愛想ながらも接するうちに伝わる優しさ。

そりゃあ、おモテになりますとも。そもそも本人が気づいていなかっただけで、中学時代や転入前にだって、明らかに暁君に好意を向けている女の子はいた。

今だって、昼休みに校庭で周防先輩や他の友達とサッカーをしている姿を見て、頬を染める女子生徒を見つけた。

その視線の先が暁君だという証拠はないけれど、おそらく正しい。だって、暁君にボールが渡る度に瞳を輝かせているのだから。

「わたしも同じタイミングで、同じ表情してるからなぁ……」

予鈴が鳴る前に一応の決着がついたようで、試合が終了する。選手たちの様子から暁君たちのチームが勝ったことがわかる。

遠目で見守る中、さっきの女子生徒がその輪の中に入っていく。彼女は暁君たちと同じクラスのようで、楽しそうに談笑を始めた。……というか、距離が近いな？　暁君は特に意識していないみたいだけど、女子生徒は明らかに暁君にアピールしている。

クラスの団欒を邪魔しには行かないが、それでも胸にもやもやとしたものを感じる。

「お兄ちゃんの恋人はわたしなんだから！　絶対に付け入るスキなんて与えない！」

そんな決心の下、すぐにでも二人の愛を確認しようと思う。

具体的には今晩お風呂上りに、暁君の部屋へ押しかけてやるんだから！

☆インプリンティング

「暁くーん。おはよー？」
「んんむ……あと……五分……すぅぅ」
そんな毎朝の定番を今日もまた繰り返す。
はいはい、と返事を返してから途中だった朝ご飯の支度に戻る。
毎日の繰り返しの中で見つけた好みの味付け。
あなたの毎日をわたしが作っている。
『インプリンティング（刷り込み）』
孵ったばかりの雛は初めて目にしたものを親鳥だと思い込むそうな。
それならお兄ちゃんは、毎朝一番最初に会って、手料理を一緒に食べ、同じ屋根の下暮らすわたしを、いったい何と捉えるのか。
……多分、普通に『妹』と捉えるんだろうな。
まあ文句はない。それ以上のことを望んでもいない。
ただ願わくば今のこの関係が、時間が、毎日が。ずっと、ずっと続けばいいのにな。
いつの日か訪れるそのときのことなんて考えない。
わたしは胸に秘めたこの感情に蓋をしながら『妹』になる。
……わたしが『妹』を刷り込んでいるのは果たして誰にだろう？
お兄ちゃんに？
それとも……。

妹の矜持／むしよけ

☆妹の矜持

今日は家の近所の夏祭りに、お兄ちゃんと二人きりで来ている。

仕事の都合をつけられなかったお父さんには「小学生だけで危ないから、二人とも絶対一緒にいるように」としっかり言い含められた。

心臓に響いてくるような和太鼓の演奏やきれいな笛の音、はしゃぐ人々の喧騒、あとは屋台のおいしそうな食べ物の匂いがどっと押し寄せる。

会場に着いてからしばらくの間は、お兄ちゃんもわたしに気を使ってゆっくりと歩いてくれていたけど、だんだんとお祭りの雰囲気に？まれてどんどん進んでいってしまう。

家を出るときにはあれだけ「虫よけはしたか」とか「歩きやすい靴にしておけよ」とかお兄ちゃんしてくれてたのに。

さりとてここで「はぐれちゃうよ、気を付けて」なんて注意したら、お兄ちゃんの中の〝兄の矜持〟が傷ついてしまう気がする。……それはちょっと避けたいな。

迷っている間にも二人の距離は離れていく。

ああ、もう！

焦ったわたしはとっさにお兄ちゃんの手を握った。

「どうかしたのか、七海？」

「あ、いや、えーと……あ、お兄ちゃん！　あれ取って！　射的のクマさん欲しい！」

繋いだ手が目的達成の証ではあるけれど、なんだか気恥ずかしくなってついついごまかしてしまったわたしがいた。

うう、お兄ちゃんがクマさんに集中している間に次の作戦を考えないと……。

☆むしよけ

今日は家の近所の夏祭りに、お兄ちゃんと二人きりで行く予定。

せっかくの夏祭りデート。華やかな浴衣を着て、髪飾りで彩り、支度を完了させる。
「お待たせ、暁君」
「ああ。……似合ってるな、浴衣。可愛い」
「ありがと。暁君も似合ってるよ、甚平姿」
「七海が着ろ着ろうるさいからな。まあ涼しくていいけど」
「じゃあちょっと早いけど行こうか。下駄履き慣れてないからゆっくりになるし」
「待った七海。出る前に虫よけしとけ」
「え？　浴衣着る前にしたけど。スプレーの」
「そうじゃなくて。もっとでっかい虫用だな」
そう言って暁君は少し視線を外して照れくさそうにわたしの左手の薬指を掴む。
「本物は流石にまだ早いけどな。それ、付けておいてくれ」
精一杯の澄まし顔に感じてしまう胸の高鳴りと、ほんのちょっぴりイタズラ心。
「えへへ、ありがと。……でーも、本当はこんなの要らないかも」
「気に入らなかったか？　七海の好みとかも考えて用意したんだが」
「そうじゃなくて。これよりも、もっと大きな虫よけがここにいるでしょ？」
「なるほど。そういうことなら、今日はずっと離さないからな。さ、行こう七海」
差し伸べられたその手をしっかり握りしめて、わたしたちは家を出た。

暑い夜とお熱い二人／願いの叶え人

☆暑い夜とお熱い二人

恋人との同棲生活。夜は当然、同じ布団に二人で身を寄せ合って眠っている。

彼女のぬくもりを感じながら身も心も休ませ、癒せる幸せ。

しかし……。

「うあっつい……」

「ここのところ熱帯夜ですもんね。冷房、もっと強くしますか？」

「寝てるときに冷えると風邪ひいちゃうからなぁ」

「じゃあこのままで。あまり気乗りしないですけど、別々に寝ます？」

「それはいい。そうするくらいなら、冷房ガンガンにして風邪ひいて看病してもらう」

「看病イベの立場、逆じゃないですかね。……明日の朝、俺が先に起きて冷たい空気を部屋に入れておきますよ」

「んー、いいよ。それよりも昂晴、腕」

涼音さんは俺の腕を引き、そこに自分の頭を乗せる。

俗にいう「腕枕」というやつだ。

「明日の朝起きた時に、このままこうして隣にいてよ」

「暑いですよ」

「冷めてるよりいいでしょ？」

上目遣いで満足気に言う俺の彼女は、そのまま頭をずらして俺の胸に額をぐりぐり押し付けるようにしてから眠りにつく。

その愛おしい仕種に、この小さな身体が離れていくのが惜しくて、俺は黙って冷房を強くするのだった。

☆願いの叶え人

本日は七夕。

まあ、あいにくの天候で天の川どころか、星ひとつ見えないのだけど。

「昂晴はさ、七夕なにお願いしたの？」
「え？　ああ、店に飾った笹の葉の短冊ですか。俺は『もっとおいしい料理を作れますように』って。涼音さんは？」
「私は『お店の料理を食べたお客さんが笑顔になれますように』って。でもまあ、織姫と彦星も気の毒だよね。年に一回の逢瀬の日に有象無象の願い事を聞かなくちゃいけないなんて」
「まあ冷静に考えると、一年ぶりのデートの日にわざわざ他人の話聞いてる余裕ないですよね」
「その点今年は良かったのかね。雲で隠されてて思う存分イチャコラできるじゃん」
「下世話。今日が終わったら、また一年会えないなら仕方ないんじゃないですか」
「そもそも、お仕事さぼったが故に引き離されちゃった人に仕事のお願いしてもねぇ」
「そんなこと言っちゃあ、願い事叶えてもらえませんよ」
「良いよ別に。私の願いはキミに叶えてもらうから」
「……おぅ」
「だからこれからも頼むよ、私の彦星様」
「……はい、お任せを。俺の織姫様」
「ま、お仕事の話は置いといて。せっかくの恋人の逢瀬の日だ。私たちも恋人しようか。もちろん、神様に怒られない程度にね」
　恋人たちの逢瀬は、静かに秘めやかに、誰にも邪魔されずに過ぎてゆく。

口実、雨／キミの隣

☆口実、雨

今日も仕事が終わり、涼音さんと二人並んで帰る夜道のこと。

何気ないワンシーンでも、愛する人の隣を歩けるだけで幸せなものである。

……それが小雨をそれぞれの傘で防ぎながらの、蒸し暑くじめじめとした帰り道でも。

「雨雨降れ降れもっと降れ～、どぅ～せ降るならちゃんと降れ～」

「なんですかその歌。童謡？　のアレンジですか。」

「だって毎日毎日嫌になっちゃうよ。洗濯物は乾かないし、いちいち傘持って出るか迷うのが面倒なんだもん。降るなら降る、降らないならちゃんと晴れてほしい」

「まあわかりますけど。……傘、出るときに降ってなかったら持たなくていいですよ」

「は？　なに、私に濡れて帰れと」

「そうじゃなくて。どうせ一緒に帰るんです。傘持ってなかったら俺のに入ってくださいよ。肩並べて帰りましょう」

「ふーん、それはいいね。……ところで、持ってたらダメなの？」

「へ？」

「だから、傘持ってたらキミのには入れてくれないの？」

「まさか。いつでもどうぞ」

俺が傾けるようにして差し出した傘に、自分の傘を閉じた涼音さんが飛び込んでくる。

そしてそのまま肩を並べるを通り越してくっつける様にして歩き出す。

「こうして帰れるなら、毎日雨でもいいかもね」

☆キミの隣

私がお風呂に入っていると「ただいま」という声が玄関から聞こえ

てきた。
その声を聞いた私は手早くお風呂を済ませる。
最近忙しくしているようでなかなか一緒の時間を過ごせていなかった。
だから今日こそは！　そう思っていたのに。
せっかく帰ってきたキミはすでにソファの上で撃沈していた。
お風呂にも入らず、布団にもいかず、何より私の顔も見ないで力尽きるなんて。
……はぁ。もう仕方ない。
ちょっとひねくれていて、それでも頑張り屋さんのキミが大好きだから。
だから頑張るキミを否定なんてできやしない。
「まったく、全然かまってもらえなくて私は寂しいんだぞ。わかってるの？」
私の力ではキミを布団までは運べないから、そっとブランケットをかけてあげる。
それでも全く起きる気配のないキミの額に私の一方的な愛情をチュッと押し付けた。
「お疲れ様。大好きだよ、おやすみ」
夢の中にまでお邪魔しようとなんて考えない。しっかりとキミの意思で抱きしめてほしいから。だから私は一人、大人しく寝室に……行こうとした足を止めて振り返る。
二人掛けのソファの真ん中に陣取るキミが目に映った。
……眠ってる間くらい隣にいてもいいよね？
私はブランケットを静かに持ち上げ、一人分には狭いスペースを確保する。

隠密訓練／喧嘩の数だけ

☆隠密訓練

わたしはレヴィ9。ただし、最後に（見習い）だとか（仮）だとかが付く。

要するに今は訓練生で正式にはまだその立場を認められたわけではないのだ。

一刻も早くその資格を得られるように、わたしは訓練以外でも鍛錬を怠らない。

人は皆寝静まったであろう真夜中。

わたしは一人、息を潜め足音を殺し、目的地に忍び寄る。

ここのマップは完全に把握できている。暗闇の中での移動でも何の支障もない。

さて、目的地もとい目標の保管されている箱の前に着いた。

あとはわたしの身長よりも大きい保管庫の中からブツを取り出して帰るだけ……。

――いける！

いくつかの引き戸の中から、迷いなく一つを開ける。よし、あった！

しかし、目標を発見したわたしは浮かれていて、背後の警戒が疎かになっていた。

――パチッと。

一瞬にして部屋に明かりが灯る。バレた。現場を押さえられてはごまかしようもない。

「……こんな時間に明かりもつけずなにしてるんだ、七海？」

「……訓練で疲れたけどなんか眠れなくて。甘いもの欲しくなっちゃったの」

「プリンくらい好きに食えばいいのに。……太っても知らないけど」

「なっ……禁句！　それは禁句なのに！　こうなったら暁君にも付き合ってもらうから。はい暁君の分のプリン。そうだ、ちょうどいいから話聞いてよ。今日の訓練でね……」

二人きりの、二人だけの甘い時間がゆっくりと過ぎてゆく。

☆喧嘩の数だけ

気持ちよく晴れ渡る天気とは裏腹に、わたしの心は曇り模様。嘘、かみなり模様。

「暁君のバカ！　アホ！　も～う、バカッ‼　……ごめんね千咲ちゃん、朝から部屋に押しかけて。しかもこんなにうるさくして」

「それは大丈夫だけどね。今日はどうしたの？　先輩と喧嘩でもした？　んだよね？」

「喧嘩というか、すれ違いというか……。今日はね、暁君と朝からお出かけする予定だったの。それなのに暁君ったら、いつまでも待ち合わせ場所に来ないし、部屋に迎えに行ったら『悪い、今起きた』って。わたし、すっごく楽しみにしてたのに」

「なるほどね。そのご機嫌斜めと朝から気合の入った格好の理由がわかったよ」

……実際のところ、昨日は遅くまで任務があったから仕方ないのはわかるけど、それはそれとしてわたしが怒るのも仕方がないとは思うのだ。

「それにしても七海ちゃん、そんなに怒って不安にならないの？　相手に嫌われちゃうんじゃないかとか、……相手のことを嫌いになっちゃうんじゃないか、とか」

「え？　それはないかな。わたしたちの間では時々あることだし。暁君はわからないけど、わたしの方は喧嘩中に仮に嫌いになっても、喧嘩が終わればまた絶対好きになるし」

「へーえ。なんかいいね、そういうの。あ、ケータイ鳴ってるよ。先輩じゃない？」

「うん、わたしたちはどんなに喧嘩しても大丈夫。絶対に仲直りできるし、また好きになる、その自信がある。だから安心して喧嘩できるしぶつかり合える。……まあ、それでもお兄ちゃんにはたくさん餃子食べてもらうけどね？」

帰省中のとある一日ＬＥＶＥＬ１，２，３

☆帰省中のとある一日ＬＥＶＥＬ１

俺の名は在原隆之介。国の非公開諜報機関『情報局特別班』の室長だ。

そんな俺には愛する息子と娘がいる。二人とも学院の寮に入っているため普段は会えない（仕事柄通信はよくする）が、今は夏休みのため昨日から二人が帰ってきている。

そのことが嬉しくて今朝の寝覚めは素晴らしく、俺は早速リビングに向かった。

リビングから声が聞こえてくる。七海ちゃんがお父さんのために朝ご飯を用意しているのかな、休日の暁にしては起きるのが早いな、なんて考えながら扉に手をかける。

「お父さんの買ってきたケーキおいしいね」

「うまいけど買い過ぎなんだよ。一晩で食べきれない量の料理を買ってくるなよな」

「悪くならないうちに全部食べちゃわないとね」

「だな。親父が起きてくるのはもっと遅いだろうし、暑さに弱いものは先に片付けよう」

「あ、暁君。クリームついてるよ。ほら」

「七海もついてるぞ。口のところ。」

「え？　……とってほしいな、お兄ちゃん」

七海ちゃんがいたずらを思いついたように微笑み、目を閉じる。

暁は妹がなにをさせたいのか悟ったように、顎に手を添えて静かに狙いを定める。

そして、ゆっくりと二人の距離が近づいて……。

「待て待て！　付き合うことは聞いたが、俺の目の前でイチャつくのは許してないぞ！」

久しぶりの家族水入らず。しかし今夏はいつもと一味違くなる予感がしてきた。

☆帰省中のとある一日ＬＥＶＥＬ２
毎日ここで過ごしていたのに、少し離れていただけでずいぶん懐かしく感じるものだ。
そんなことを考えながら柔らかいソファに腰を掛ける。
色も形も座って見える景色も、何も変わらないはずなのに。
唯一、俺の隣に座る存在との関係だけは変わったが。
「お兄ちゃん。はい、あーん」
「あーん」
七海に差し出されたものを確認もしないで口に入れる。ん、ピノだ。
「甘くて冷たくてうまい」
「ふふ。はい、もっとどうぞ。あーん」
七海は微笑みながら次々と俺の口にピノを放り込んでくる。
２個３個４個５個６個……。
「……あ。全部あげちゃった。わたしも食べたかったのに」
落ち込む姿を見た俺は、手でクイクイと呼びよせる。そして。
「ん、……ん。チュ……。――ぷはっ」
俺の口の中に残っていた最後のピノを七海の口に押し込み、そのまま二人で味わった。
「ん。甘くてうまいな」
「甘くておいしいけど、熱くなってきちゃったよ……。――ん」
蕩けたチョコレートアイスの余韻を感じながら、それとは違う甘さを求め始める。

☆帰省中のとある一日ＬＥＶＥＬ３
静かな部屋の中で布が擦れる音と微かに荒い息遣いが漏れ聞こえる。
「ん……んむっ……んっ、んん……。……お兄ちゃん、がっつきすぎだよ」

「……仕方ないだろ。こっちに帰ってきてからずっと我慢してたんだから」
ここはわたしの部屋。位置的にお兄ちゃんの部屋よりお父さんの部屋から遠い、けど。
「あんまり物音立てるとお父さんの部屋まで届いちゃうかもよ。バレちゃうよ」
「大丈夫だって。声を出さなきゃいいんだろ？　俺のことよりも七海は平気なのか？」
「わたしだって平気だもん。わたしのことよりも、お兄ちゃんの方が心配だな。ここ、こんなに膨らんでるよ？」
わたしはズボンの上からお兄ちゃんのを優しく撫でる。
お兄ちゃんは反撃するかのようにわたしの胸を直に鷲掴みにする。
「生意気な妹だ。そんなこと言ってられるのも今のうちだぞ」
「っん……お兄ちゃんこそ。余裕ぶってられるのは今のうちだけなんだから」
啖呵を切りあうと、どちらともなく顔を近づける。もちろん手はそのままで。
「ちゅぅ……んんっ、んじゅる、ちゅっちゅっちゅ……んんーーー……っ」
きっと、こんなところでこんな勝負を始めてしまった時点で、お互いに勝ち目などなかったのだ。
次第に来ていた服も、場所も、秘する理由も。全部全部忘れて。
わたしたちはただ互いの熱さに溺れていくのだった。

ザクザクザクザクザクザクザクザク……／ネコネコウインク

☆ザクザクザクザクザクザクザクザク……

ああ、なんかやけに悶々とする。

原因はわかっているのだ。

時期に関係なく厨房は暑いが、この季節はなおさらそうだ。

いつもは生真面目にネクタイまできちんと絞めている昂晴がだれるのも仕方ない。

休憩時間だからネクタイを緩め、首元をパタパタ扇ぐのも仕方ない。

その汗ばんだ肉感やにおいにつられて私が変な気分になるのも仕方ないことなのだ。

調理に集中する自分と、欲望渦巻く自分が、ぐるぐると私の中でせめぎあう。

「……昂晴。……昂晴。……昂晴」

折衷案（になっているか微妙だが）として、彼の名前を呼びながら調理を進める。

もはや体に染みついた仕事は煩悩まみれの状態でも問題なく完遂される。

さて、次のオーダーは……。

これなら、材料はまとめて用意しちゃった方が手っ取り早いかな。

「……昂晴。……昂晴。……昂晴昂晴昂晴昂晴昂晴昂晴昂晴昂晴昂晴昂晴……」

そんな彼女を静かに見守る休憩上がりの二人の姿があった。

「にひひ。どうですか高嶺さん？　最愛の彼女が自分の名前を呼びながらムラムラしている様子は。なかなかにクルものがありますか？」

「……いや。俺の名前を呼びながら一心不乱にウインナーを刻んでるのは素直に怖い」

☆ネコネコウインク

酒が入っているせいで幻覚を見ているのかもしれない。いやきっと幻覚に違いない。

だって目の前になぜか猫ミミ猫シッポの涼音さんがニャーンとポーズをとって俺のことを誘惑してくるのだから。いや可愛い！可愛すぎるな！

ミミもシッポもピコピコ動いて体が小柄なこともあって本当に子猫のようだ。

そのうえ、

「にゃーん。ご主人様～。構ってほしーにゃーん♡」

なんて台詞自体はテキトーだが猫のように鳴く姿がまたあざと可愛い。

ぐっ、とつい顔がにやけそうになるのを必死に堪える。

いや別に勝負をしているわけではないが挑まれてストレートに負けを認めるのも男が廃るというもの。何より俺の反応を引き出そうと涼音さんがもっといろいろしてくれるかも、という下心が俺の表情筋を支える。

そんな俺の鉄仮面を見た涼音さんの頬が、むー……と少し膨れる。

かと思えばコテンと小首を傾げ、勢いそのままに左目をパチリとウインクを披露する。

その弾丸は次はどんなあざといポーズを決めるのか、と構えていた俺の防壁をフェイントのように潜り抜けてグサリと突き刺さった。

「……ふふ、凝った格好をしなくても案外簡単に落とせるものだね？」

俺の陥落した表情を見て猫ミミ涼音さんは満足そうに勝利を宣言する。

それはだって、元々素のあなたに落とされてるんだから当たり前の話なんですよ。

七海インポスター／七海インジェクション

☆七海インポスター

いかなる困難でも七海と一緒なら乗り越えられる。言葉なんてなくても互いに通じ合っている自信がある。そんな油断が俺にはあったのかもしれない。

だから……。

「わたしのこと信じてくれてありがとう。でも、ごめんね。……バイバイお兄ちゃん」

「勝った！　やったね千咲ちゃん！」

「うん！　ナイスキル七海ちゃん！　さすが先輩をキルするのうまいね」

「あー……暁君ずっとわたしの後ろついてくるからね。だからわたしがクルーの時は心強いんだけど、インポスターの時には『お兄ちゃんどいて！　その子殺せない！』って感じで……ちょっと困る。暁君をキルする分には隙だらけで簡単なんだけど」

「うおぅ。さすが『『『シスコン』』』」

イヤホン越しに壬生さんの声と他のみんなの声がピンポイントで重なる。……おい。

「いやいや。クルーの団体行動は基本だろう。そこにシスコンは関係ない」

「いやいや。ゲームの中でさえつきまとうのはシスコン以外何物でもないからね？」

「いいだろう。そこまで言うなら次のゲームで証明しようじゃないか」

そう宣言すると俺はマイクをミュートにした。それに続いてみんなもミュート表示になり次のゲームに備え始める。

「……どこでもわたしのことを守ってくれるのは嬉しくは思ってるんだよ？」

イヤホンを介さない唯一のその声はイヤホン越しよりも少しくぐ

もって聞こえた。

☆七海インジェクション

「うう……お兄ちゃん……いやだよ、お兄ちゃん」

七海が俺の腕にがっしりしがみついて離さない。

家に帰って服を脱いだら絶対赤く痕になってると思う。

「嫌だ嫌だって言っても仕方ないだろ。お前今年受験生なんだから病気になったら大変だぞ。予防接種くらい大人しく受けてこい」

「だっていやなものはいやなんだもん。うう、おに……おに……」

「おいそこで止めるな。涙目の妹を引きずり歩いてる俺が〝鬼〟みたいじゃないか」

「……こんなに泣いてる妹をなぐさめてくれない兄なんて鬼と変わらないもん」

「そうかい。俺も来週受けるから立場は変わらないんだけどなぁ。……ところでここに親父からもらったご褒美用の軍資金があるんだが……」

「帰りにプリン買って行こう！　あとクッキーとチョコレートも！」

「へいへい。ちゃんと注射頑張れたらな」

「あああああ……一瞬だけ忘れられたのに……。お兄ちゃん診療室の中までついてきてくれる？　手繋いでてくれる？」

「……別にいいけど、それ七海は恥ずかしくないのか？　来年から高校生だろ？」

「だってだって、注射怖いんだもん……。お願いお兄ちゃん！」

手を繋ぐくらいは構わないが……これだけ横で怖がられると来週俺も受けるのが嫌になってくる。兄の意地にかけて妹の前で半べそなんてかけないのが辛いところである。

ご挨拶／五月病特効薬

☆ご挨拶

良く晴れた空の下を二人で歩く。なんて言うとまるで海岸沿いでも散歩しているように聞こえるが、ここはなんてことはないただの街路である。

「……本当に着いてくるの？」

「着いてくるも何も、ワタシが連れ行って、って言い出したことでしょ？」

「別に楽しいことはないと思うよ」

「楽しいことだとは思ってないけど。それでも、ご挨拶はしたいからね」

「そこまで気にしなくてもいいのに」

「こう言っていいのかわからないけど、せっかくの機会だからね。さすがにお盆とかに着いてきちゃうと本当に邪魔になっちゃうから。だから今日はちゃんと〝未来のお嫁さん〟って紹介してよね」

「わかってるよ。ちゃんと紹介する。……っと着いた。先にここで花買って行かないと」

「なにを買うかは決まってるの？」

目的地への道すがら、立ち寄った花屋で品定めをするオレに、紬は優しく問いかける。

紬だってわかっている。こんな日に買う花はそれしかないのだと。

「仏花として何が正しいのか、オレはよく知らないけどね。でも、今日ならこれしかないよね」

オレは、陳列されている中からなるべく鮮やかなものを選び、店員に声をかける。

――　一束のカーネーションを大事に抱えながら。

☆五月病特効薬

新しい生活にも慣れ、緊張や不安が遠のき気持ち的にだれてしまう

恐ろしい病。
――その名も『五月病』。
この四月から勤め始めた会社ではそれはもう精一杯働いていた。
しかし、初の長期連休を味わった今、やる気に再ブーストをかけるのが難しい。
「あー、会社行きたくねー。働きたくねー。学生時代に戻りたいー」
わずか二か月前までのことがやたらと遠くに感じる。
こんなこと、せっかくの休日に紬に愚痴ってもどうにもならないが甘えてしまう。
「それなら、頑張った分だけご褒美上げるから。そしたらやる気でる？」
「……でる。すごくでる。紬さん、具体的にご褒美とはどのような……？」
「なんでもいいよ。ちゃんと頑張ったなら柊史くんが望むことなんでもしてあげる」
「なんでも。……ちなみに、明後日からの仕事のためにご褒美前払いは可能ですか？」
「はぁ、仕方ないね。わかった、なにしてほしいの？　ちなみにひとつだけです」
「ぐ、ひとつか。ちょっと待って。厳選するから」
「……それとさ。ワタシにももちろんあるんだよね？　頑張ったご褒美」
紬が上目遣いでそう尋ねてくる。その仕種だけでも可愛くて、もはやご褒美レベル。
「も、もちろん。オレにできることならなんだって。というか紬に甘えられるとか普通にご褒美……。当然ながら明後日からのための前払いもアリです」
「やった。なにしてもらおうかな。それじゃあまずは手始めに――」

妹空間／デートが始まるタイミング

☆妹空間

状況を整理しよう。今この場には壁も床もなく、ただただ空間が広がっている。

足で床を踏んでいる感覚はあるけど床はない。どれだけ目を凝らそうともこの空間の境界は見えやしない。

え？　何これ？　どういう状況？

というかなんで七海は我が物顔で仁王立ちしてるの？

ちなみにその肩には『本日の主役』と書かれたタスキが掛かっていた。

それもやけに豪華で七海の趣味に合っているものだからもしかして手作りだったりするのだろうか。

「さて、お兄ちゃん」

七海が問いかけてくる。

「妹の仕事は兄のお世話をすることです。では、兄の仕事は？」

「いやそれは仕事ではないと思うが……。ええ……妹を守ること、とか？」

「惜しい！　満点！」

「惜しいのに満点なのか……」

「兄の仕事はそれにプラスして妹を甘やかすことです。それはもう盛大に。というわけでお兄ちゃん、椅子になって」

「は？　それ妹じゃなくて女王様だろ」

「何言ってるの？　早く座って？　ほら早く。そう、それで膝広げて」

七海に促されて胡坐で座る。七海はその上にきれいに収まると指をパッチンと――。

――七海の好きなクッキーが出てきた。なんでもありかこの空間。

「お兄ちゃーん。食べさせてー？　あーん」

まあ、七海が嬉しそうだから何でもいいか。

☆デートが始めるタイミング

「お待たせお兄ちゃん、待った？」

「いいや。俺も今来たところだ。……なんだその顔」

「驚いた。２０分も前なのにもういるなんて。絶対ギリギリか遅れて来ると思ってた」

「わざわざ待ち合わせデートをしたいと言われたからな。俺をなんだと思っているんだ」

「毎朝妹に起こされて、それでも起きられなかったお兄ちゃん？」

「返す言葉もございません」

「でもそっかぁ。お兄ちゃんは〝恋人〟のためならちゃんとできるんだね。〝妹〟じゃ苦労したのになぁ」

「……悪かった。反省してるからあまりいじめないでくれ」

「どーしよっかなー。そういえばあそこのお店で新作スイーツが出たらしいなー」

「オーケー、わかった。それで手を打とう。……打たせてくれ」

「仕方ないなー。それで許してあげようかな」

「助かる。それで？　念願の待ち合わせはどうだった？」

「んー。新鮮で楽しかったけど、もういいかな」

「あれ、なんで？　なにか不満だったか？」

「……だって、出発から一緒の方が長くデートできるから。ほら行こお兄ちゃん！」

「急がなくたってスイーツはどこにも逃げないよ。って引っ張るなって！」

「今日はデート始まるの遅かったんだから。その分楽しい思い出いっぱい作らないと！」

いつもの日常に飴玉を／雨の待ち人

☆いつもの日常に飴玉を

いつもの日常。いつもの朝。なんの代わり映えもしない普通の毎日が今日も始まる。

いつもと少し違うのは今朝はお父さんが早くに家を出たくらいかな。

あと、確かお兄ちゃんも……、

「七海。今日は日直当番だから先に出るな。行ってきます」

「はーい、行ってらっしゃい」

朝ご飯の後片付けをしながら、慌てて家を出るお兄ちゃんに返事をする。

いつもよりも早くに出るのにいつも通りの時間に起きるからバタバタするんだ。それだってわたしが何度も起こしに行ってやっとだし。

わたしはいつも通りに落ち着いて支度をして家を出る。ああ、今日は帰りの頃には雨が降るんだっけ。傘を持って行かないと。……だというのに。

まったく。どうして傘置きに傘が二本も残っているのか。一本はわたしのだから当然として、もう一本の持ち主はついさっき家を出たばかりのあわてんぼうである。

一緒に朝ご飯を食べてるときにちゃんと「今日は雨降るよ」って言ってあげたのに。

本当に、わたしがいなきゃダメなんだから。

「……仕方ない。本当に仕方ないなぁ。雨に打たれるのも可哀そうだもんね」

優しい妹がちゃーんと傘を届けてあげよう。

周りに誰もいないこの状況で、ついつい口元が緩むのをわたしは特に気にもしない。

そしてわたしは一本だけ傘を残して、いつも通り学校へ向かった。

☆雨の待ち人

参った。せっかく学校が終わったのに、外はがっつり雨が降っていて傘がない。

今朝七海に傘を持つよう言われた気もするが、急いでいたので忘れてしまった。

仕方ない。覚悟を決めて家まで突っ走るいかないか。

……わざわざ見せ物になる気もないから、せめて時間を潰して人が少なくなってから。

そう考えて下校ピークを過ぎたころに昇降口に降りると、よく知った顔を見つけた。

お気に入りの傘を差しもしないで雨空を見上げては髪をいじり、水たまりにかかる波紋を見てはスカートのしわを直す。

どうやらそのまま帰る気もなく、何かを待っている様子。

というか、自惚れでないなら待っている〝何か〟は確実に……。

「あ、お兄ちゃん！　やっと来た。遅いよもう」

気づかれた。そしてやっぱり待ち人は俺だったようで。

「悪い。……いや、特に待ち合わせとかしてないよな？　どうしたんだ？」

「え。いやあの、そういえば家出るときにお兄ちゃんの傘残ったままだったなー。お兄ちゃんずぶ濡れになったら可哀そうだなー、って。ほら、なんでもいいから早く帰ろ！」

「気づいたなら持ってきてくれたらよかったのに。というか昼のうちに連絡してくれればここまで時間潰すこともなかったんだが……」

「あーもうはいはい、いいから早く帰ろ。二人で入るには狭いからちゃんと詰めてよね」

妹と相合傘をする姿を人に見られないのは、結果的には幸いだった。

すきだよ／固定観念

☆すきだよ

ザザーとさざ波が寄せては返す音が聞こえる。頬を撫でる潮風が心地よい。

「息抜き、海でよかったのか？　しかも海岸を歩くだけとか」

「いいの。少し羽を伸ばしたかっただけだから、何の準備もしてないし」

高校受験の勉強にうんざりして、家庭教師役の昂晴君を引き連れて気分転換タイム。

「あーあ、勉強なんてもうしたくないなー」

なんて言いながら、波打ち際で数式や英単語を書き連ねる。

書いたそばから波にさらわれていくその光景はちょっとだけ面白かった。

「あんまり波に近づいて派手に濡れたりするなよ」

「そこまで子どもじゃないもん。大学生になったからってわたしのこと子ども扱いしすぎだよ」

成長したって中身は子どものままのくせに。思ったことがすぐに口にも顔にも出るし。

……だから、わたしのことを見ていないことがわかっちゃうし。

「そうかい。じゃあ俺、コンビニでアイスでも買ってくるから。希はなにがいい？」

そう言って海辺にしゃがむわたしを置いて、昂晴君は歩き出す。

「あ、待ってー。わたしも行くー。アイス自分で選ぶ！」

最後に一言、たったの四文字だけを書いてわたしは立ち上がる。

波に消えるまでの数秒間、その言葉を眺めただけで少しすっきりした気がする。

いつか、ずっと消えないこの想いをあなたに届けたい。

☆固定観念

本日分の授業が終わったわたしたちは、灼熱の陽を浴びながら体が溶ける前に何とかコンビニのアイスコーナーに辿り着く。
アイスを冷やすための冷気が、熱気をまとった体を優しく迎えてくれた。
「ひゃー外あっつーい。早くアイス食べたーい。希ちゃんはなににする？」
「うーん、モナカもいいしバリバリくんも捨てがたい……」
ショーケースに並ぶアイスたちを見比べて、わたしは今日一番の集中力を発揮する。
「どうしよう、やっぱりパプコがいいかなぁ。でも今、昂晴君いないしなぁ……」
「え、こーせーくん？　って誰？　その人がどうかしたの？」
「だって昂晴君がいなきゃ、わけっこできないから。……～～～！　なし！　今のなし！　何でもないから！」
アイス選びに没頭するあまりにした自分の失言を慌てて取り消す。
うわ、なんだか外にいた時よりも顔が熱い。
「あ、その人ってあれか。いつも希ちゃんが話してる幼馴染の人か」
「そうだけど！　違うからね！　変な意味はないから！」
「なるほどねー。いつもその人とわけっこしてるんだ。仲良いね」
「もういいから！　ほら愛衣ちゃん、わけっこしてパプコ二人で食べよ？」
「はーい。僭越ながらこの火打谷愛衣、幼馴染さんの代わりを務めさせていただきます」
「だから、そういうのじゃないんだってばーーー！」

タオルに込めた想い／欲しかった思い出

☆タオルに込めた想い

げほ、げほ、とやけに乾いた音の咳が聞こえる。

昂晴君が大学に入学してから約一ヶ月。新しい環境にもそろそろ慣れたかという油断からか、風邪をひいてしまったようで。それとなく毎日様子を聞いていたら、何やらおかしい。その疑念からこうしてお見舞い……というか看病に来ていた。

「悪いな、希。いきなりこんなカッコ悪いところ見せて」

「んーん。カッコ良い昂晴君はわたしも見たことないから大丈夫」

「希さん⁉　病人にはもう少し優しくしてくれてもいいんじゃないですかね⁉」

「うそうそ。ほら、そんなに大声出すと喉痛めるよ。この土日でしっかり治さないと講義に出られなくて困るんじゃないの？」

そうやって昂晴君を宥めながらなんとなく散らかっている部屋の掃除をする。

大学生になって少しは大人になったかと思えばそんなことないし。というか、わたしをおいて一人で大人にならないでほしいし。

まあ話を聞く限り、昂晴君の想い描いていたバラ色の大学生活と現実は違ったようで、未だに浮ついた話の一つも聞かないのは安心しているのだけど。あ、そうだ。

「お昼、お粥とおうどんどっちがいい？　……ってやけに静かだと思ったら寝てるし」

風邪を治すためにはそれでいいんだけどね？

「まったく。こっちの気も知らないでいい気なもんだよ」

わたしはこの秘めた想いを冷たいタオルに込めて昂晴君の額にバシッと叩きつけた。

☆欲しかった思い出

学校の友達と一緒に写った写真を、昂晴君家のテーブルに並べてみ

る。
「お、修学旅行の写真か。俺の時もここに行ったな。懐かしい」
「うん。昂晴君の時にたくさん写真見せてもらったからね。見覚えのある場所では大体撮ったかな」
「……本当だ。ここもそこもあっちも、なんか見覚えあるな」
「でしょ？　わたしは初めて行ったのになんだか懐かしくなっていっぱい撮っちゃった」
「楽しかったか？　まあ笑顔で写ってる写真がこれだけあるなら聞くまでもないか」
「もちろん楽しかったよ！　さすが修学旅行だね、一生の思い出だよ！」
もちろん楽しかった。大切な思い出だ。
……でも。
友達と笑いながら初めて歩く道の途中で、なぜかここにいない人の顔が思い浮かんだ。
どうして今、その人がわたしの隣にいないのかがわからなかった。
本当、同じ年に生まれて、一緒に学校に行けたらよかったのになぁ。
授業中に先生の目を盗んで手紙の交換をしたり、ふと目が合って笑いあったり。
出席番号で指名される日の朝になって慌てて「宿題見せて！」なんて言ってみたり。
そんな些細なやり取りだって、きっとかけがえのない思い出になったのだろう。
あなたがその道を歩いたのは四年も前のことなのに、いつまでもそれを考える。
そしてその四年後に、あなたとの架空の思い出を辿ってわたしの思い出を作り上げる。

ハローインナイトメア／焦げ茶色のやさしさ

☆ハローインナイトメア

目が覚めるとそこは夢の世界だった。いや、夢であってほしいという俺の願いだが。

何せ学園中いたるところに七海がいるのだ。それはもう、うじゃうじゃと。全員一様に表情が暗いのが気になる。そしてなぜか七海以外の学生の姿は見当たらない。

「あ、起きた？　お兄ちゃん」

「っ！　ここにも七海が⁉」

この七海は他の七海と違い、表情が明るく魔女っぽい三角帽子をかぶっている。

「今日のお兄ちゃんにはミッションがあります。それはここにいる七七三人のわたしの亡霊を満足させること」

「いきなり何を……。七七三人？　亡霊？　ミッション？　意味が分からないんだが」

「ここにいるわたしは過去に押し殺した感情が具現化したもの。例えばあそこにいるのは小六の頃に反抗期のお兄ちゃんに構ってもらえなくて寂しかったわたし。そっちにいるのは中二の体育祭でお兄ちゃんが女の子と二人三脚してて嫉妬した時のわたし」

「それが七七三人分……え、重すぎない？」

「女の子に重いとか禁句だから。除霊の方法はただ一つ。あの頃押し殺したわたしの感情を成就させること。ちなみに夜が明けてお兄ちゃんの目が覚めるまでがタイムリミットだから。それを過ぎると、成仏しきれなかったわたしがお兄ちゃんに憑りつきます。それじゃあ準備はいーい？　張り切って行ってみよう！　トリックオアトリート‼」

「憑りつ……⁉　というか俺の知ってるトリックオアトリートだいぶ違うな！」

☆焦げ茶色のやさしさ

『――座は……ごめんなさい！　最下位です！　今日は忘れ物やドジをしちゃったり雨に降られちゃうかもしれません。ラッキーアイテムは焦げ茶色のハンカチ！　一日の不運を全部ぬぐい取っちゃいましょう！』

「ガーーーン……」

「……どうしたんだ、七海」

朝ご飯を食べながら顔面蒼白になっているわたしにお兄ちゃんが聞いてきた。

「今日の星座占い、順位が最下位だった……。どどど、どうしよう～」

「占いぐらいで大げさな。そこまで気にする必要ないだろ」

「違うの。今日は数学の授業で当てられる日だし、理科はグループワークの結果をクラスの前で発表しなくちゃいけないの。あと他にも……」

「わかったわかった。そこまで気にするならラッキーアイテムを持っていけばいいだろ？　確か焦げ茶のハンカチだったか」

「あそっか、そうする。……わたし、焦げ茶色のハンカチなんて持ってない……」

すると暁君は「ハァ」とため息をついて席を立つ。それから戻ってきたと思ったら、

「ほら、俺のハンカチだ。のんびりしてたら焦って余計にドジするから七海も急げよ。ご馳走様でした」

それだけ言って部屋に戻ってしまった。

そのぶっきら棒なやさしさが染み込んだハンカチが今日のわたしを守ってくれる。

特別な日には／ポッキーインパクト

☆特別な日には

いつものように、というほどではないものの今日も今日とてミノムシ作戦を決行する。

今回はちゃんと計画立てての行動だから、すんなり窓が開いて部屋に入れた。

「それで？　今日はどうしたんだ？」

お兄ちゃんが目を逸らしながらぶっきら棒に聞いてくる。

「いくらお兄ちゃんが鈍いからって、なんとなくはわかってるでしょ？」

そんな風に答えると「まあな」と照れくさそうに一言だけが返ってきた。

いつまでもそっぽを向いているものだからぐるっと回り込んでみるけど、お兄ちゃんは絶対に目を合わせないようにその場でクルクル回りだす。これはこれでちょっと楽しいんだけど、明日はせっかく特別な日なんだから今日はもう寝てしまわないと。

わたしはドーン！　と回る勢いそのままにお兄ちゃんをベッドに押し倒す。あ、やっと目が合った。体勢的にやたらと距離が近いけど、お楽しみは今日ではない。だから。

「今日はもう寝よっか？　お兄ちゃん」

日が変わったころにふと目が覚めた。お兄ちゃんは隣で静かに寝息をたてている。

特別な日には目が覚めた瞬間から会いたくて。誰よりも先にその言葉を贈りたくて。

それが今夜、わたしが訪れた理由だ。夜が明けるまではまだかかるから、わたしはもう一度目を閉じる。でも、その前に一言。本人には聞こえてないからフライングだけど。

「お誕生日おめでとう、お兄ちゃん。大好きだよ」

☆ポッキーインパクト

本日は11月11日。つまりはポッキーの日である。

だから昨日のうちにちゃーんと準備しておいたのだ。あんまり食べると太っちゃうから一箱だけ。早速今日帰ったら食べるんだ。

……と思っていたのに。

「……悪い。ちなみにこれが最後の一本だったりする」

信じられない。よりによってこのタイミングで。いくらイベントごとに興味がないからって普段は食べないお菓子を今日は食べるなんて。学校から帰ってきたら無性にお腹が減っていたとは犯人の供述だ。いくら申し訳なさそうにしていたって到底許せない。

「もう咥えちゃってるけど……食べるか？　なーんて」

それを聞いたわたしはお兄ちゃんが発言を撤回しないうちに反対側からポッキーをパクっと咥えた。

お兄ちゃんは冗談のつもりで言ったようで、目を見開いたままで固まっている。

それをいいことにわたしはパクパクパクパクとポッキーを食べ進んでいった。当然、顔はどんどん近づいていって、お兄ちゃんの目がどんどん大きくなっていく。そしていよいよ口同士が触れる、というタイミングで……「ふんっ！」と。

わたし渾身の頭突きがノーガードのお兄ちゃんの額に決まった。

そして目を白黒させているお兄ちゃんを置いてわたしは自室に戻る。それから……。

「……っ！」

枕に顔を沈め、ゼロ距離のお兄ちゃんの顔を思い出して足をバタバタさせたのだった。

慣れてたはずの香り／等身大の初恋

☆慣れてたはずの香り

いつものように昂晴君家に向かう途中で急な大雨に降られてしまった。だから……。

「ずぶ寝れのままだと風邪ひくだろ。風呂入って、その間に服は洗濯しちゃえば？　洗濯機の使い方とかタオルの場所、わかるか？」

「当たり前でしょ。普段誰が洗濯して片付けてると思ってるの？」

「はいはい。服洗ってる間の着替えは出しといてやるから早く温まってこい」

そう言う昂晴君に背を押されて、お風呂を借りることになってしまった。

正直このお風呂場は何度も見てるし、わたしが掃除することもあるから最早慣れた場所ではある。……でもわたし自身が入るとなると話が違う。

昂晴君家で裸になってるのが気恥ずかしくて、ササッとシャワーを浴びて体を拭く。

昂晴君が用意してくれた着替えはこれか。たまに着てるのを見る普通のジャージ。

ワイシャツだったら〝彼シャツ〟とかやってあげたのに。いや〝彼〟じゃないけど。

そんなことを考えながらありがたくジャージを着て、髪を乾かす。

乾かしたばかりの髪から漂うシャンプーの香り。そして着てるジャージからも……。

やばい。昂晴君の匂いが強い。普段からお洗濯とかしてあげてるからこの匂いには慣れていたけど、それが自分を包み込んでるこの状況はやばい。くらくらしてくる。

早く、早く自分の服の洗濯と乾燥を終わらせないと……！

――それでもまあ、洗濯し終わった自分の服から漂う昂晴君の香りにまたドギマギすることにはなったんだけど。

☆等身大の初恋

初めて会った日のことなんてもう覚えていない。気が付けばそこにいるのが当たり前で、なくてはならない存在だった。

だからこの気持ちがいつからだったのかも分からないし、この感情の名前を知ったのだってそれが生まれてからずっと後のことだったと思う。

長い時間を過ごす中で、この気持ちは小さかったわたしの思い込みなのかもしれないと思ったこともあった。年だって離れているし。

４つ差とは割と大きなもので、小学校でもなかなか会う場面がなかったというのに、中学校以降になるとそもそも一緒の学校に通うことすらできなくなってしまう。

それは実らないなんて話もよく聞くし、幼馴染の関係なんて大きくなったら途切れちゃったりするのかな。そう考えて怖くなったことだってある。

そして今、今なお隣を歩く昂晴君の横顔をわたしはじっと見つめてみる。

「……なんだ、希。俺の顔に何かついてるか？」

「ううん、そうじゃなくて。昂晴君も大きくなったなぁって」

わたしも女の子としては色々大きい方だと思うけど、昂晴君の方がもっと大きい。

互いの成長を感じる度に、今までずっと一緒にいられたことが嬉しくなる。

そして、この想いはいつまでも消えることなく続いている。これまでも、これからも。

だからわたしをきちんと見てもらえるまでは、ずっと隣にいてずっと一緒にいるんだ。

わたしは今、等身大の初恋をしている。

わたしにとっての／アツアツ鍋パーティー

☆わたしにとっての

とある雨の日。二つ傘がゆっくりと並び歩く。

お互いの傘の分だけいつもより少しだけ遠くなるのが少し寂しい。

「買い物一緒してくれて助かったよ。週末は買うもの多いからちょっと大変なんだよね。特に雨が降ると、傘を差す分余計に」

「……あー、悪いな。いつも家事とか任せきりで。その……何か思うこととかあるか？」

「いいよ別に。今さらなに？　わたしそんなに嫌々そうにやってるように見える？」

「そういうことじゃないけど……。ほら、一応俺が兄なわけだし、妹に対して〝いい〟兄をやれてるのか、って。そんな風に思って――」

――ブォォオオオ、バッシャア！　と。

わたしたちの横を一台の車が通り過ぎた。水しぶきを盛大に跳ね上げる形で。

「……荷物、大丈夫？　濡れてない？」

「……妹よ、少しはずぶ濡れの兄の心配もして欲しい」

髪から服から水を滴らせるお兄ちゃんがボソッとつぶやくその言葉に、

「……フ、フフフ！　こんな漫画みたいにびしょびしょになること本当にあるんだね」

思わず笑いがこみ上げる。だってわたしは少したりとも濡れていないのだ。横を歩くお兄ちゃんに守られる形で。今回は偶然かもしれないけどいつだってわたしを守ってくれる。だからきっとそんなお兄ちゃんにはこう言ってあげていいだろう。

「〝いい〟お兄ちゃんは知らないけど、お兄ちゃんは〝最高〟のお兄ちゃんだよ！」

☆アツアツ鍋パーティー

日が短くなり、めっきり寒くなってきた今日この頃。我が家の本日の夕食は妹特製、熱々のお鍋である。日中の寒さを乗り切った体を、内側から温めてくれる具材をこたつに入って食べる幸せ。最高に冬を満喫できるメニューだ。だというのに……。

「……やっぱり厳しいな。だいぶマシになってきたが、まだうまく箸を持てない」

俺は学校の体育の授業で利き手を突き指してしまったのだ。おかげで室長には「手が使えないなら今夜の任務は他の者にやらせる。お前はさっさと帰って、そのたるんだ精神を切り替えてこい」なんて言われてしまうし。ちなみに室長は急な人員調整のため今も働いている。本当に申し訳ない。

「七海、フォーク取ってくれるか？　それなら食べられると思うんだが」

「んー。それよりちょっとやってみたいことがあるんだけど」

そういうと七海はとことこと俺の後ろに回り、ぴったりと張り付く。そして俺を間にしたまま鍋に箸を伸ばし、器用に豆腐をつかみ取る。いわゆる、〝二人羽織〟の姿勢だ。

「お兄ちゃん動かないでね。えっと、この辺かな……。はい、あーん」

「はい……って、フォークさえくれれば自分でできるから！」

子ども扱いされているようで気恥ずかしいし、背中に感じる柔らかさに嫌に緊張する。

「いいからいいから。ほらあーん……っあ！」

「――ぅあっっ⁉　やるならせめてちゃんと口の中に入れてくれ！」

と言いつつ、その後も好きなようにやらせた俺は、やはり七海に甘いのかもしれない。

秘密の暴走（小）／特別な一輪

☆秘密の暴走（小）

とある日の放課後、コンコン、とオカ研部室の扉がノックされた。

「は、はーい。どうぞ、空いてます」

そう返事をしたものの、今部室にはワタシ一人しかいない。複雑な相談事だったりしたら対応できるかな。せっかく来てくれたのだから、できるだけ力にはなりたいんだけど……。

「失礼します。あれ？　椎葉さんだけ？」

「あ、越路さん。うん、今はワタシだけ。もしかして戸隠先輩に何かご用？」

「うん、そう。……なんだけど、いないなら仕方ない、出直すよ。急ぎの用事でもないし」

「そうなの？　越路さんさえ良かったらここで待っててもらってもいいよ？　お茶とかも淹れられるし」

「いいの？　じゃあお言葉に甘えて待たせてもらおうかな。……ジー……」

「うん！　お茶はなにの……む？　どうかした？　ワタシ何か変？　いや男の子の格好してて変もなにもって感じだけど」

「椎葉さん確かに男の子の格好してるけど、しっかり女の子だなと思って。態度だったり、仕草だったりが」

「そう？　えへへ、なんか嬉しいかも、なんて」

「それに隠れてるけどスタイルも結構いいよね？　着やせするタイプというか……。ちょっと学ラン脱いでみてくれる？」

「へ？　え、越路さん、目が怖いよ？　越路さん？　聞こえてる？　待ってー⁉」

☆特別な一輪

やばいやばい、時間に遅れる。

あいにくの雨が降る中、本日のデートの待ち合わせは駅前だった。

しかも厄介なことに、こんな日に限って携帯電話を家に忘れてきてしまった。
ただでさえ約束ギリギリなのに、今から取りに戻っていたのでは確実に間に合わない。
とにもかくにも、一刻も早く待ち合わせ場所に向かわなくては。
……だというのに。
駅前の屋根のある場所には人が溢れていて、収まりきらない人たちはそれぞれの傘を広げて雨に打たれている。
その色も大きさも実に多様で、いきなり色鮮やかな花畑の中に放り込まれた感覚……いやそんなことよりも。
紬に限って遅れるということはないので、この中にいるはず。
すぐ近くにいるはずなのに連絡手段がないことがもどかしい。
ええと、確か紬のお気に入りの傘の色は……と。
カラフルな傘の中から目的の彼女を探す。みんな傘で顔が見えないから本当に厄介だ。
――ふと、視界に入った。
探していた色ではなかった。でも、絶対にそうだと思った。
近づくと、傘が少し持ち上がって中の彼女の表情が、ぱぁっと咲いた。
花々がそれぞれの色を競う中、オレはようやくたった一輪のオレだけの花を見つけた。

不意打ちツーショット／ハートショット

☆不意打ちツーショット

カシャリ、とスマホのシャッター音が響く。画面に映るは先輩と私のツーショット。

「……先輩、写真撮られるの下手ですね」

「カメラを向けられるとどんな顔すればいいのかわからないんだよ」

「なるほど。だからこんな硬い表情なんですか」

「そんなにひどいか？」

「そうですね。少なくとも普段私に見せてくれてる笑顔よりは断然。いつもはもっと素敵な笑顔なのに……」

「千咲と一緒にいられるだけで俺は幸せだからな。笑いもするさ」

「それなら……もっともーっと一緒にいなきゃですね、せーんぱい！」

私は言いながら先輩にギュッと抱き着いてみる。

「いくら何でもずっとこの距離にはいられないと思うが」

「それはそうでしょうけど、いられるときにはこうしててもいいでしょ？」

「……そうだな。できるときにはずっとこうしていた――」

「――隙あり！」

カシャリ、とスマホから音がする。

一瞬の隙すらも見逃さない。イマドキの女子高生を舐めるな！

「……やったな、千咲」

「いひひ、いーい笑顔頂きました！」

☆ハートショット

バンバンバン！　ぎゃーぐわー！　バンバン！　ドカン！

ここは銃弾と悲鳴の飛び交う激しい戦場。

私は先輩と二人だけで、人類を救うために与えられた、高難易度ミッションを成功させなくてはならない。私たちが人類最後の希望……。

……まあもちろん、ゲームセンターのガンシューティングゲームの中の話なのだけど。現実でそんな世界はごめんである。平和に平穏に私の愛する人たちと笑って生きていたい。
「先輩！　ラスト決めますよ！」
「ああ！　これで……とどめだ！」
　私たちが同時に放った弾丸は見事ラスボスの頭に命中し、ゲームクリア！
「やりましたね、先輩！　あ、更新は無理でしたけどなかなかスコア高いですよ！」
「クリアは嬉しいけど、思ったよりも当たらなかったのが悔しいな」
「いやいや、先輩めちゃくちゃ当ててましたから！　しかもほとんどヘッドショット！　本当にこの手のゲーム経験ないんですか？」
「皆無というほどじゃないが、あまりないな。どうせなら全弾命中させたかった」
「いいじゃないですか、クリアできたんですし。カッコよかったですよ？　それに……」
「それに？」
「先輩は私の大事なものを、ちゃんとワンショットで打ち抜いてるじゃないですか」
　ピンと来ていない先輩の銃を、私は自分の胸に押し当て言葉を重ねる。
「それとも、ツーショット目いっときますか？　なーんて、いひひ♪」
　実際は二度では到底足りないほど打ち抜かれているんですけどね、先輩。

バレバレの贈り物／願いと答え

☆バレバレの贈り物

クリスマス。恋人たちの逢瀬の日。そんな日にワタシたちは待ち合わせをしていた。

「お待たせ柊史くん。待った？」

「いいや、オレも今来たところだよ。行こうか」

冬の中でも特に寒い今日、ワタシだって待ち合わせの時間よりも先に着いたのに、柊史くんは当たり前のようにそう返してくる。それに応じようとして……あ、いや。

「ちょっと待って。先に……ハイこれ。メリークリスマス」

「ありがとう。じゃあオレからも……紬、メリークリスマス」

ワタシが手に持っていた包装を柊史くんに手渡すと、お返しに柊史くんからも一回り小さい包装が手渡された。お互いに、もらったばかりのそれを丁寧に開ける。それぞれの中身、柊史くんはマフラーを、ワタシは手袋を確かめて、大事に胸に抱えた。

「そうだ柊史くん。そのマフラー、ワタシが巻いてあげるよ。ちょっと貸してね」

若干強引に柊史くんの首に抱き着くようにして巻き始めと、柊史くんは照れながらも、ワタシが巻きやすいように少し屈んでくれた。……うん。良かった、よく似合ってる。今日の気候には不釣り合いに首元だけ開いていた柊史くん。ワタシの贈ったマフラーはその恰好を埋めるようにぴったり収まった。

……まあ、あれだけ露骨にプレゼント候補を探ってたら柊史くんにもバレちゃうよね。

「あったかい。大切にするよ。紬も、その手袋着けてみてくれないか？」

ワタシは冬の風ですっかり冷たくなった手に、その大事な手袋を付けていった。

☆願いと答え

色とりどりに輝く装飾が、冷たい冬の空に映える。季節の風物詩とも言える幻想的な風景が人々を魅了し離さない。オレと紬も、目の前の景色に呑まれていた。けど。

あまり見惚れてもいられないな。さすがにこの人ごみの中だと紬とはぐれかねない。そんな思いで紬の様子を見ると、両手を胸の前で合わせて食い入るようにイルミネーションを見ていた。……いや、時折視線を下ろして、新しい手袋を見て嬉しげに微笑む。

オレが贈った手袋を喜ぶのを見て、オレは安心するとともに――嫉妬していた。

まさか自分が贈った手袋に嫉妬する日が来るとは……。紬の白い手を包んでいるのが、オレの手でないことが我慢できない。幸いこの人の量だ。きっと「はぐれたらいけないから」と紬に言えば、それだけでスマートに手を繋げるだろう。

でも、それは嫌だと思った。紬と手を繋ぐのに言い訳なんてしたくなかった。

「紬」

一言そう呼びかけるだけで、紬はこちらを向いてくれる。次の言葉を待って、紬はキョトンとしている。寒さで頬が赤く染まる中でのその表情がとても愛おしい。

「紬。手、繋いでくれませんか？」

付き合いたての頃のように恭しく。オレはそっと手を差し出す。紬はその仕種に少し驚いて、でもすぐにオレの目をまっすぐに見つめながら「仕方ないなぁ」と笑う。

「絶対に拒むわけないって、知ってるくせに」

オレたちはしっかりと互いの手を握り合い、同じ景色を一緒に眺めるのだった。

新しい景色／推定高さ三メートル

☆新しい景色

日が落ち、寮の門限を気にしながら気持ち早足で学院に戻るデートの帰り道。

「そういえば、イルミネーション出す家増えてきたな。いつもの通りがにぎやかだ」

「そうだね。この季節になると夜に外歩くだけで楽しいから好きなんだ。ね、覚えてる？　家にいた頃にも近くにイルミネーションがきれいな住宅街があったよね」

「ああ、七海が行きたいって言うからよく一緒に行ったよな。人が多くて大変だった」

「風情がないなぁ。他の人なんてどうでもいいんだから。……今年もさ、一緒に見に行こうよ」

「いいぞ。結局、今年もいつもと同じだな」

「違うよ。全然違う」

そして七海は俺の目をまっすぐに見つめながら、指を絡めて手を握った。

「今年からは〝妹〟じゃなくて〝恋人〟と見るんだから。見方が変われば きっと見える景色も変わってくるよ」

手袋越しからでも感じる七海の温もりにふいに顔が火照ってくる。

「あはは、お兄ちゃん照れてるの？　今からそんなんじゃこの先持たないよ？」

そう言い残して七海は駆け出した。繋いだ手を引かれて俺も走り出す。

思えば、兄として俺が七海のことを引っ張っていくことの方が多かった。

それが今や、門限を気にしているとはいえ手を引かれるとは……。

俺はこれから何度、七海と新しい景色を見られるのだろうか。

☆推定高さ三メートル

みんなは〝一年間の距離〟を考えたことがあるのだろうか。

わたしが知る一年間の距離。それは推定高さ三メートルである。これは例えるならそう、校舎の一階差分だったりする。

大きく踏み出せば、横方向になら二歩やそこらで到達できる距離。しかし残念、人は自由に空を飛べない。仮に驚異の大ジャンプを披露できたとしても天井に阻まれる。

そんな距離感でわたしはずっとその背中を追ってきた。

一年というこの距離が大きすぎる。大体のイベントごとは一緒にできないし、わたし以外の女の子との思い出話なんて聞きたくもない。廊下でたまにすれ違うことがあったとしても、せいぜい小さく手を振るくらいしかできやしない。

わたしが一歩歩みよれば、その分だけ遠ざかってしまう。

絶対にわたしのことを置いてはいかないし、振り返っては優しい目を向けてはくれるけど、この差が埋まることは絶対にない。ずっとそう思ってた。

だから勢い任せだったとしても、この手が届いたことがとても嬉しい。

そして、一度掴んだこの手は二度と離してあげない。

たった三メートルがなんだというのだ。どんな時でも一緒にいたい。わたしのその想いは誰にも何にも止められない。

だから今日もわたしは窓から飛び出し、たった三メートル下にいるお兄ちゃんに会いに行くんだ。